

資
料

(六十周年記念出版)

(平成二十五年十二月)

第五十八回「合宿教室」(厚木)感想文集

日本人としての自覚をもとめて

公益社団法人 国民文化研究会

第五十八回 “合宿教室（厚木）” 全参加者の感想文と短歌詠草



とき 平成二十五年八月二十二日（木）から二十五日（日）まで三泊四日間
 ところ 神奈川県厚木市「七沢自然ふれあいセンター」
 参加総数 一四二名

目次

“はしがき” に代へて	理事長 上村和男	2
大学別参加者数・その他の人数の内訳		4
“合宿教室” 58年の歩み		5
“合宿教室” の日程表（三泊四日）		7
第58回 “合宿教室” のあらまし		8
走り書きの “感想文” と第二回目の “短歌詠草”	参加者全員	27
合宿中に創作された「短歌詠草」	参加者全員	73
あとがき		88
カメラ・レポート22枚（29ページから71ページの左頁に掲載）		

「はしがき」に代へて

(公社)国民文化研究会理事長(東海ゴム工業(株)顧問)

上 村 和 男

昭和三十一年(一九五六)の本会創立以来、第五十八回目を迎へた「全国学生青年合宿教室」を、八月二十二日から二十五日までの三泊四日間、神奈川県厚木市「七沢自然ふれあいセンター」に於いて開催致しました。ここは「合宿教室」が九州地区以外で開催される端緒になった最初の会場で、今回で六回目の使用になりました。

今年は例年に比べ猛暑が続き、開催中の夜も寝苦しい中、日程行事は円滑に進められました。「朝の集ひ」では国旗掲揚・国歌斉唱・ラジオ体操が行はれ、二日目のレクリエーションではバスで大山阿夫利神社の下社へ参拝に出掛けました。長い石段を汗かきつつ登る中で詠まれた多くの短歌が「短歌全体批評」で紹介されました。三日目の夜は「戦時平時を問はず、祖国日本のために尊い命を捧げられた、全ての祖先のみ霊」をお迎へして慰霊祭を厳かに執り行ひました。

全国各地から参加した男女大学生並びに社会人と主催者側の講師・助言者を合せ総数一四二名は喧噪な都会生活から暫く離れ、静かな自然の中で心ゆくまで「人生と学問」を語り合ひました。

この感想文集の表紙にサブタイトルとして「日本人としての自覚を求めて」とありますが、日本の歴史を知らない学生や青少年が増加しつつあることを憂慮してのことです。戦後の歴史教育では、自らが育った自国について、マルキシズムの思考から抜け出せず、例へば自衛隊を「暴力装置」と表現したり「侵略性」があるとの観念を植付け教育がなされる、一方で、隣国の中国や韓国は「日本は戦前の軍国主義国家」を指さうとしてみると喧伝・扇動し続けてきてゐるため、それへの反発が国内にあります。単なる反発ではなく、今こそ日本の歴史や伝統を踏まへた勉強が必要であると考へます。さうした観点から日本政策研究センター代表の伊藤哲夫先生を招聘して歴史事実に基づいたご講義をいただきました。

参加者は伊藤先生をはじめ多くの講師・助言者の懇切な指導によって「歴史に学ぶといふことは一体どういふことか」、また「知識の伝達が主軸となってしまつてゐる現代日本の大学は果たしてこれで良いのか」、さらに「人として生きる基本として、人と交はる時にどういふ心掛けで相対すべきか」などについて心底に留め、勉強していくことの大切さを痛感されたのではないかと思ひます。

そして、今後の学生生活・社会生活の中で生かしていくための大切な何かを得得するものが有つたと確信してをります。恐らくきつと今の日本の欠陥が一体どこに宿つてゐるかについて気づかれた所があつたと思ひます。主催者としての願ひは実はそのにあります。さうした点から出発し直して下さることこそ、今の日本に求められる所だと思つてます。

この「感想文集」は合宿日最後の帰り際に走り書きで書かれたもので、充分意を盡されたものではありませんが、精魂を傾けて過ごした合宿での思ひを書き留めてくれたものです。紙面の都合で全文を載せられないのが残念ですが、是非ともご精読賜りますやうお願いいたします。

この文集に十余名の会員が休日を割いて取組んでくれました。また、この合宿を運営された運営委員長の廣木寧さんをはじめ運営委員の方々、指揮班長の最知浩一さんと指揮班員の方々々に心から感謝いたします。

最後になりましたが、この合宿教室事業を実施するに当たり、今年もまた、各界からお寄せいただいたご支援に対し、会員一同に代り心から厚く御礼申し上げます。

来夏（平成二十六年）の「第五十九回合宿教室」は九月五日（金）から八日（月）の三泊四日間、兵庫県「国立淡路青少年交流の家」で開催します。

詳細の合宿案内パンフレットは三月ごろ配布予定です。多数の皆様のご参加をお待ちいたします。



第58回全国学生青年合宿教室（平成25年8月22日～25日） 於「七沢自然ふれあいセンター」

参加者

（学生班）（算用数字は参加学生数）

東北大学1 筑波大学1 東京大学1 亜細亜大学1 学習院大学1

神奈川大学1 國學院大學2 専修大学2 拓殖大学1 中央大学1

明星大学1 京都大学2 立命館大学1 大阪大学3

追手門学院大学1 九州工業大学2 九州産業大学1 福岡大学10

中村学園大学2 熊本大学2 宮崎公立大学1

アメリカンスクール・イン・ジャパン高等学校1

計 三十九名（うち女子六名）

（社会人参加者） 二十二名（うち女子七名）

（招聘講師） 一名

（国民文化研究会） 六十八名

（事務局・アルバイト） 五名

（見学者・慰霊祭協力） 七名

総計 一四二名

— “合宿教室” 58年の歩み —

回数	年度	開催地	参加人員	主 要 講 師
1	昭和31年	霧 島	92	広田洋二・日下藤吾・川井修治
2	〃 32年	福 岡	127	竹山道雄・高山岩男・浅野晃
3	〃 33年	佐 賀	72	勝部真長・木下彪・森三十郎
4	〃 34年	阿 蘇	160	花田大五郎・中山優・野口恒雄
5	〃 35年	雲 仙	200	木内信胤・花田大五郎・佐藤慎一郎
6	〃 36年	雲 仙	203	小林秀雄・木内信胤・津下正章
7	〃 37年	阿 蘇	215	福田恆存・木内信胤・黒岩一郎
8	〃 38年	雲 仙	202	竹山道雄・木内信胤・木下広居
9	〃 39年	桜 島	202	小林秀雄・広田洋二・木内信胤
10	〃 40年	大 分	215	岡潔・花見達二・木内信胤・夜久正雄
11	〃 41年	雲 仙	240	福田恆存・木内信胤・戸川尚
12	〃 42年	阿 蘇	336	林房雄・太田耕造・木内信胤
13	〃 43年	霧 島	353	竹山道雄・高谷覚蔵・木内信胤
14	〃 44年	阿 蘇	403	岡潔・木内信胤・木下道雄・奥田克巳
15	〃 45年	雲 仙	491	小林秀雄・木内信胤・桑原暁一
16	〃 46年	霧 島	302	村松剛・木内信胤・戸田義雄
17	〃 47年	阿 蘇	402	木内信胤・山本勝市・胡蘭成
18	〃 48年	雲 仙	433	村松剛・木内信胤・山口宗之
19	〃 49年	霧 島	528	小林秀雄・木内信胤・戸田義雄
20	〃 50年	阿 蘇	435	福田恆存・木内信胤・夜久正雄
21	〃 51年	佐世保	372	長谷川才次・村松剛・木内信胤
22	〃 52年	雲 仙	332	木内信胤・衛藤藩吉・高木尚一
23	〃 53年	阿 蘇	440	小林秀雄・木内信胤・松本唯一
24	〃 54年	霧 島	268	木内信胤・高山岩男・山田輝彦
25	〃 55年	雲 仙	431	福田恆存・法眼晋作・宝辺正久
26	〃 56年	阿 蘇	353	齋藤忠・村松剛・青砥宏一
27	〃 57年	霧 島	321	齋藤忠・黛敏郎・幡掛正浩
28	〃 58年	雲 仙	327	齋藤忠・小堀桂一郎・長内俊平
29	〃 59年	阿 蘇	302	吉岡一郎・小堀桂一郎・加納祐五
30	〃 60年	阿 蘇	249	市原豊太・高村坂彦・小田村四郎
31	〃 61年	島 原	294	江藤淳・村松剛・小柳陽太郎
32	〃 62年	阿 蘇	269	小堀桂一郎・鈴木一・關正臣
33	〃 63年	島 原	227	児島襄・小堀桂一郎・加納祐五
34	平成元年	島 原	204	村松剛・山田輝彦・国武忠彦
35	〃 2年	阿 蘇	204	黛敏郎・小柳陽太郎・占部賢志
36	〃 3年	厚 木	244	田久保忠衛・国武忠彦・山内健生
37	〃 4年	阿 蘇	257	村松剛・平川祐弘・奥富修一
38	〃 5年	厚 木	271	村松剛・佐伯彰一・白濱裕
39	〃 6年	阿 蘇	253	徳岡孝夫・小堀桂一郎・絹田洋一
40	〃 7年	厚 木	240	小川三夫・長谷川三千子・東中野修道

回数	年 度	開催地	参加 人員	主 要 講 師
41	〃 8年	阿 蘇	171	竹本忠雄・伊藤哲夫・坂口秀俊
42	〃 9年	厚 木	213	西尾幹二・竹本忠雄・酒村總一郎
43	〃 10年	阿 蘇	193	小堀桂一郎・徳岡孝夫・志賀建一郎
44	〃 11年	富 士	178	井尻千男・長谷川三千子・山口秀範
45	〃 12年	阿 蘇	154	小堀桂一郎・東中野修道・布瀬雅義
46	〃 13年	富 士	150	伊藤哲夫・長谷川三千子・小野吉宣
47	〃 14年	江田島	244	中西輝政・山内健生・青山直幸
48	〃 15年	富 士	171	小堀桂一郎・伊藤哲夫・占部賢志
49	〃 16年	阿 蘇	169	中西輝政・小田村四郎
50	〃 17年	伊 勢	219	長谷川三千子・松浦光修
51	〃 18年	霧 島	191	井尻千男・吉田好克・占部賢志
52	〃 19年	奈 良	175	小堀桂一郎・小川三夫・小野吉宣
53	〃 20年	伊 勢	150	伊藤哲夫・占部賢志
54	〃 21年	厚 木	160	長谷川三千子・ペマギャルポ・占部賢志
55	〃 22年	阿 蘇	151	中西輝政・小柳左門
56	〃 23年	江田島	141	小堀桂一郎・山内健生
57	〃 24年	阿 蘇	152	竹田恒泰・小柳志乃夫
58	〃 25年	厚 木	142	伊藤哲夫・國武忠彦
累計・参加人員			14,594	

平成25年 第58回全国学生青年“合宿教室”日程表 (厚木)

6.00	8月22日(木)	8月23日(金)	8月24日(土)	8月25日(日)	6.00
		起床(6:00)	起床(6:00)	起床(6:00)	
7.00		朝の集ひ	朝の集ひ	朝の集ひ	7.00
		朝食	朝食	朝食	
8.00					8.00
9.00		講義 「近隣諸国の動向と日本国のありやう」 日本政策研究センター 代表 伊藤哲夫先生	講義 「古事記—神武天皇—」 昭和音楽大学名誉教授 關武忠彦先生	講義 「思想の国柄」 中島法律事務所 中島繁樹先生	9.00
10.00		質疑応答		班別研修	10.00
		写真撮影		移動	
11.00		班別研修	班別研修	全体感想自由発表	11.00
				地区別懇談	
12.00	受付: 13:00 開始 開会式: 14:30 開始			感想文執筆 第二回短歌創作	12.00
		昼食	昼食	清掃	
13.00	開会式 (挨拶) 国民文化研究会 代表 オリエンテーション 合宿趣旨説明及び諸注意伝達 合宿運営委員長 廣木 寧氏 合宿指揮班長 巖知浩一氏	短歌導入講義 大阪湾広域臨海環境整備センター 久米秀俊先生	学生体験発表3名 会典発表 北濱 道氏	閉会式 (挨拶) 国民文化研究会 副理事長 合宿運営委員長 廣木 寧氏	13.00
14.00			創作短歌全体批評 羽後信用金庫石籠支店 須田清文先生	閉会式終了(13:00)後、昼食・解散	14.00
15.00		野外研修・短歌創作			15.00
16.00		「大山」散策	班別短歌相互批評		16.00
17.00	自己紹介及び班別研修 「日本への回帰 第48集」輪読				17.00
18.00		(短歌提出)			18.00
19.00	夕食 入浴 休憩	夕食 入浴 休憩	夕食 入浴 休憩		19.00
20.00	合宿導入講義 「再生すべき『日本』とは何か」 東洋紡織 庭本秀一郎先生	古典講義 「身を修むるを以て本と為す」 關寺子屋モデル代表取締役 山口秀範先生	講話 国民文化研究会 小田村四郎名誉会長 慰靈祭説明 元 山口県立熊毛南高校教諭 實邊矢太郎 先生		20.00
21.00			慰靈祭		21.00
22.00	班別研修	班別研修	班別研修		22.00
23.00	就寝	就寝	就寝		23.00
	消灯	消灯	消灯		23.30

第五十八回 “合宿教室” のあらまし

第一日目

(八月二十二日・木曜日)

第五十八回全国学生青年合宿教室は、神奈川県厚木市「七沢自然ふれあいセンター」にて開催された。全国から集った参加者は、それぞれの思ひを胸に受付を済ませ、開会式に臨んだ。

開会式

合宿教室は京都大学一年安永知生君の開会宣言で幕を開けた。国歌斉唱に続いて、「戦時・平時を問はず祖国日本のために尊い命を捧げられたすべての祖先のみ霊」へ黙祷が捧げられた。次いで主催者を代表して今林賢郁国文研副理事長が「敗戦後遺症を克服して生き生きとした日本を取り戻すために、国民一人一人、とりわけ若い学生青年の心の中に国を思ふ心を蘇らせた。それが合宿教室を続けてゐる私共の願ひです」と述べた。来賓の宮台功厚木市副市長から「激励のお言葉」を頂戴した後、参加学生を代表して東京大学大学院一年の高木悠君が「班員、講師、さらには先人の言葉に耳を傾け、しっかり取り組んでいきたいと思います」と呼びかけた。廣木寧合宿運営委員長は、ここで学ぶ歴史は暗記物ではない。先人の言葉に学び、その魂に触れる歴史だ。歴史の大海は皆さんを溺れさせず、伸び伸びと泳がさうと待ち構へてゐる。楽しく学んでほしいと語りかけた。



冒頭で、「歴史に日本の再生を学ぼう」と参加を呼びかけて来たが、その「再生すべき日本」はどこにあるのか、それは先人の言葉に感応する私たちの心の中にあると強く述べられ、まづ新渡戸稲造の著書である『武士道』について語られた。

ドイツ留学時代の新渡戸が、ベルギー人教授から、学校で宗教を教へずしてどうして道徳教育を授けるのかとの質問に答へられなかったことが『武士道』著述の動機となつてゐたことを、講師自身が学生の頃米国に留学し、「神道は邪教だから改宗した方が良い」と言はれて自身の宗教について初めて意識した経験と重ね合せながら説き始められた。

『武士道』に掲げられてゐる徳目は、私達の価値観の中にも生きてゐるとして、その要となる価値である「忠義」が命をかけて実行されたことを吉田松陰『講孟箚記』からの一節を抄出して説かれた。「君に事^{つか}へて遇^あはざる時は、諫死するも可なり、幽囚するも可なり、飢餓するも可なり。是等の事に遇へば、其の身は功業も名誉も無き如くなれども、人臣の道を失はず、永く後世の模範となり、必ず其の風を観感して興起する者あり」。自らの社会経験を抛り所に松陰の言葉に近づかうとした過程を語られた。

最後に、先人の言葉を自分のこととして受け止め、考へ、感じとつていくことの大切さを訴へて講義を締めくくられた。

講義終了後、参加者は各班室に戻り、導入講義についての班別研修を行った。講義内容を正確にたどりながら、講師の最も伝へたかったこと、重要なことは何かを確認し、そのうへで各々の思ふことを論じ合った。なほ、この班別研修は、以後の各講義

の後にも行はれた。緊張のせゐるか、初めのうちは意見も少なく発言も限られてゐたが、お互ひに打ち解けるに従ひ次第に討論も活発となり、班員相互の交流が深められていった。

第二日目

(八月二十三日・金曜日)

合宿の日程は「朝の集ひ」から始まる。すがすがしい空気の中、国旗掲揚、体操を行った後、毎朝唱歌のプリントが配布され、元山口県立熊毛南高校教諭の寶邊矢太郎氏により、歌のなつかしい紹介と皆での合唱が行はれた。唱歌は次の通りである。

二日目(八月二十三日) 「埴生の宿」

三日目(八月二十四日) 「冬の夜」

四日目(八月二十五日) 「故郷」

講義 「近隣諸国の動向と日本国のありやう」

日本政策研究センター代表 政治アナリスト 伊藤 哲夫 先生



先生はまづ、中国の動向から始められた。「中国公船による領海侵犯が繰り返されてゐる。中国の『尖閣は我が物』といふ主張はウソで固められたもので、根拠がない。しかし恥かしげもなく国際社会に繰返し言ひ続けてゐる。中国が主張する『尖閣諸島は台湾に付属する島だ』とする主張は、カイロ宣言やポツダム宣言に照らしても根拠ない」。

次に韓国の動きに触れられ、その「反日」一色の暴走は常軌を逸してゐて理解を超えてゐると指摘された。戦前の法律に基づいた「徴用」が日本の左翼用語である「強制連行」と同義語に使はれてゐ

ること、戦前から戦後にかけての財産請求権の処理が十三年間に渡る交渉でまとまり、日本からの経済協力資金が韓国の経済発展の基盤になってゐること等々を事実即して説明された。

そして中韓両国の筋の通らない主張はどこから出てくるのかを次のやうに述べられた。「中国には『正史』といふ考へ方がある、一つの王朝・権力者が革命によつて倒されると、倒した側は自分に都合の良い歴史をつくる。現政権から見た『正しい歴史認識』、それはいはばイデオロギーとも言へるが、中国共産党政権による『大躍進』や『文化大革命』『天安門事件』への評価、『南京大虐殺三十万人』といふ数字の決め方にも現れてゐる。すべてが政治となつてゐる。そこには極端な権力闘争の連続と『自分達が世界の中心なんだ』とする『中華思想』がある。一方、韓国には勢力の強い方にすり寄り、日本を野蛮国だと見下す『事大主義』がある。中韓とも、近代国際法に基づく公正な秩序を尊重する觀念が未発達で、歴史を貫く一貫した考へ方が存在しない」。

その後、先生は中韓とは国の本質を異にする日本の文化的な奥深さ、公正さを知つてほしいと、明治初期の文明開化時に於ける思想の混乱に触れ、如何にして本来の日本の国柄に戻したかを「五箇条の御誓文」と「教育勅語」を読みながら説かれ、国家の中心が何なのか、何を大切にしていかなばならぬかといふ基本軸を把持し続けた官僚・井上毅が果した思想的な役割について触れ講義を終へられた。

短歌創作導入講義

大阪湾広域臨海環境整備センター 久米秀俊 先生

最初に、東日本大震災の折、教師をしてゐた息子を亡くした母親の悲しみ、児童を守れなかつたであらう息子の無念を思ひやる母親の気持ちがいばれる連作短歌を紹介しながら、「短歌を通して、時間、空間を超えて切実な体験や真摯な思ひを知ることができる」と語られた。次に明治時代の正岡子規が「歌よみに与ふる書」の中でとりあげた紀貫之と源実朝の短歌への批評を紹介



介され、「子規は、技巧的な巧みさ比べをするやうな短歌ではなく、源実朝の『八大竜王雨やめたまへ』と祈る歌に見られる嘘偽りのない真率な心情のこもった短歌を好んで、それを目指した」と話された。

続いて、子規の短歌革新の志に魅かれて弟子入りした伊藤左千夫が師の正岡子規と遣り取りした短歌を紹介され、「子規の病床の苦しみに左千夫が心を寄せ、左千夫の病弱の子供の看病の苦勞に子規が心を寄せる広やかな心の交流の世界を感じられる」と、短歌を詠み交はすことよって、生涯の友や師を得ることができると述べられた。

最後に、題材、用語など短歌の作り方の基本をいくつか説明され、感動のありのままを言葉にして欲しいと講義を結ばれた。

野外研修（大山散策）

短歌創作をかねて参加者はバスに分乗して関東総鎮護の大山阿夫利神社（下社）に向った。崇神天皇の御代に創建されたと伝えられる式内社で、江戸時代から多くの参詣者を集めてゐる由緒ある古社である。

古典講義 「身を修むるを以て本と為す―先人に習ふ生き方―」

（株）寺子屋モデル代表取締役 山口 秀範 先生

冒頭、合宿教室のテーマでもある「先人の言葉に学ぶ」といふことの楽しさ、大切さについて伝へたいと仰って講義を始めた。『論語』の一節「学びて時に之を習ふ…」を挙げられ、ここに『学ぶ』ことの喜びが第一に説かれてゐる。『学ぶ』とはすなはち歴史上の立派な人物に『真似る』ことに通ずると述べられ、その実践者として、江戸時代の中江藤樹が、『大學』に記



された古代の聖人の学問に対する姿勢に憧れ、それに習って学問の道に進み、遂には「近江聖人」とまで称される大学者となったことを紹介された。さらに、同じく江戸時代の熊沢蕃山が若き日に「学問の師」を求めてゐた折、後に師事する藤樹を知ることとなった際の逸話（旅人が馬上に忘れた二百両をそっくりそのまま持ち主に届けた馬子が藤樹の教へを仰いでゐた話を耳にして、藤樹先生こそ我が師だ…）を紹介された。蕃山が藤樹に出会ふといふ「人の縁」に触れて、このやうな出会ひが、ここで学んでゐる学生諸君にまさに明日起るやも知れない。その出会いの機縁は各々の求める心の真剣さにかかつてゐると述べられた。

最後に、若い学生諸君に対し、自分探しではなく、藤樹や蕃山のやうに、良き師を求めて、歴史上の偉人の生き方にお手本を見出し、それを真似ることが大切なのではないか、また蕃山が学問の基本姿勢とした「一人の日本人として学ぶ」といふことも感じて欲しいと語られた。

第三日目

（八月二十四日・土曜日）

講義 「古事記―神武天皇―」

昭和音楽大学名誉教授 國 武 忠 彦 先生

初めに「日本人は天皇について教へられなさ過ぎたが、歴史の中で考へて初めて分ってくるのが天皇であり、古事記を読まずして天皇は分からない」と話されて、『古事記』の神と天皇の系譜の話に入られた。

高御産巢日神の「ムスとは成り出でるものことであり、不思議や驚きが日本の神様である。何と自然で身近で分りやすい神様だらうか」と述べられた。次に天孫降臨・国譲り・御東征に触れるなかで、「言向けやはす」について「日本の平定は言葉で



こちらに向けさせる。征伐ではなく、道理を正して相手を帰服させていったことを意味する言葉だろう」と述べられ、また「ウシハク」と「シラス」について「なぜ言葉に分けたかが日本を知る鍵である」と指摘され、「ウシハクが自分の占有物とする占領する意味であるのに対し、シラスとは、知ること、即ち国土国民の心、魂を我が物として認識することであり、実際に現地に行って見て知って精通するやうな意味合ひで、天皇様のやうな公平無私のお立場に立つことよってのみ可能になるのではないでせうか」。また『日本書紀』の「天壤無窮の神勅」を示され「日本を日本たらしめてゐる根本の言葉であり、日本人はこれによつて天皇様をお守りして来た」と述べられた。

さらに「知るとは心に味はつて国民の心を己の内部に再生する、対象と一体となつて分ることである。天皇様は常にそれをなさつてをられ、国民はその天皇様がおいでになるこの国に生れた喜びを感じ、この方のためなら命を捧げてもいいと思つて来た。これが国の元首であり、象徴である。天皇は現憲法の第一条に書かれてはゐるが、果してさういふ所まで私たちの認識は深まつてゐるでせうか」と問ひかけられた。

学生発表



初めて参加した合宿教室で、昭和天皇の終戦時の御製を知り、自分の身はどうなうと、国や国民を守らうとされる切実な御心に大変感動したといふ体験を語った。

國學院大學大学院文学研究科二年 相澤 守



福岡大学経済学部四年 西脇 悠平
大学の勉強会、福大寺子屋塾での勉強を通して知った宮本邦彦警部と野村望東尼を紹介し、自らも二人のやうに誰かのために行動できる日本人になりたいとの決意を述べた。



大阪大学経済学部四年 岩井 中 健
就職活動の際、「生活の安定」を第一に考へてゐたが、吉田松陰先生の生き方を知り、「自分がどう社会に貢献できるか」を考へることの重要性に気づいたと語った。

会員発表



合宿運営副委員長 北濱 道 氏
戦前昭和十年代、当時の形骸化した学風を正すべく学園の正常化に力を尽され、戦時中に亡くなられた人達の手紙、歌、日記等を収めた『いのちささげて―正・統―』（国文研叢書19・20）を紹介した。この本に収録されてゐる方々が、「友達と心が通ひ合ふ世界を求めながらも、それをなかなか実感できない苦しみを打ち明けてをられ、そこに心が動かされた」と語り、特に心惹かれたといふ若野秀穂さんの連作短歌を紹介し、感想を述べた。

羽後信用金庫石脇支店 須田 清文 先生



班別での相互批評を前にして、必携書『短歌のすすめ』から相互批評の注意点として、自分が高い立場に立っての批評は避けるべきこと、思ひつきの批評は避けること、作者の表現を忠実に守ることの三点を挙げられた。続いて、参加者の短歌を何点かとりあげ、正確な表現に字句をなほされ、他人に分るやうにするためにはどうするか、取り組まれた。相互批評は、短歌を直すのではなく、あくまで詠者の心に添って、より適切な言葉をさがすことであると述べられた。

最後に合宿に寄せられた国文研会員の歌を紹介し、明治天皇御製「たのしみ」（明治四十年）、
「かへりごと待つぞたのしきつみためしことのはぐさを人にみせつつ」を紹介され、「歴史に日本の再生を学ぼう―先人の言葉に学ぶ―」との本合宿のテーマとも関連づけて短歌相互批評の大切さを繰り返し述べられた。

班別短歌相互批評

全体批評のあと班別短歌相互批評が行はれた。自分の心の動きを正確に表現し相手に伝えることの難しさ、また人の言はんとしてゐることを正確に受け止めることの難しさを実感させられた。一首一首の短歌を、班員全員が納得できる表現にしようとして尽力し時間を超過してしまふ班も多くあったが、その分自分の心、相手の心をじっくりとみつめるといふ貴重な体験をすることが出来た。



日本国憲法は、占領軍が起草して、占領軍が日本に強制したものであると述べられ、「内容的に見ても、全く憲法の名に値しない代物である。憲法は国家と不可分であるにも拘らず、日本国憲法には国家が存在しない。典型的には、第九条で、国家の基本的な要素である国防、軍隊を否定してゐる」と根本的な疑念を示された。「帝国憲法は、大変柔軟性のある憲法であり、美濃部達吉博士も佐々木惣一博士も改正する必要なしとの意見であつた」と、およそ学校では教へられてゐない事実を示された後、日本国憲法制定史の真実と、帝国憲法の真実の二点を、国民が知ることが、憲法改正のために是非とも必要なことであると痛感してゐると述べられた。

慰霊祭

齋行に先立って、元山口県立熊毛南高校教諭の寶邊矢太郎先生から、慰霊祭齋行の趣旨と祭儀の手順が説明された。開会式の初めに「戦時・平時を問はず祖国日本のために尊いのちを捧げられたすべての祖先のみ霊」に一分間の黙祷を捧げたことに触れて、「慰霊祭といふ一つの形を通して私たちの心をととのへ、国のために尊いのちを捧げられたすべての祖先のみ霊をお祭りの庭にお迎へし、海の幸山の幸をお供へして、おもてなしをすること」であると説かれ、「その方々が後の世に託し遺されたお気持ちをお偲びし、私たちもまた受け継いで行かうとの思ひをこめてお祭りをしたい」と言葉を重ねられた。またみ霊に対する所作として、「最敬礼」「低頭」「二拝二拍手一拝」等の仕方を具体的に示され、神社にお参りの際も実行されたいと促された。

慰霊祭は宿舍から徒歩五分ほどの屋外に、国文研会員によって設しつへられた斎庭ゆいばで厳修された。祓詞に代へて山口秀範常務理事による、三井甲之詠の「ますらをの悲しきいのちつみかさねつみかさねまもる大和島根を」の朗詠に始り、地元・神奈川県元小学校長岩越豊雄先生による御製拝誦、澤部壽孫副理事長による祭詞奏上と続き、次いで参加者一同で「海ゆかば」を奉唱した。私たちの祖先が古いにしへから、山川草木を亡き人をお祭りしてきたそのままに古式ゆかしく、夜のしじまのなかで、祭儀は厳修された。

左は拝誦された「御製」と奏上された「祭文」である。

御製拝誦

明治天皇御製

秋夕

(明治三十九年)

国のためうせにし人を思ふかなくれゆく秋の空をながめて

歌

(明治四十一年)

まごころをうたひあげたる言の葉はひとたびきけばわすれざりけり

祝

(明治三十七年)

檀原の宮のおきてにもとづきてわが日本の国をたもたむ

柱

(明治四十二年)

檀原のとほつみおやの宮柱たてそめしより国はうごかず

昭和天皇御製

暁鶏声

(昭和七年)

ゆめさめてわが世を思ふあかつきに長なきどりの声ぞきこゆる

松上雪

(昭和二十一年)

ふりつもるみ雪にたへていろかへぬ松ぞををしき人もかくあれ

皇居内の勤勞奉仕者

戦にやぶれし後の今もなほ民のよりきてここに草とる

(昭和二十七年)

古の文まなびつつ新しきのりをしりてぞ国はやすからむ

今上天皇御製

(平成十九年)

務め終へ歩み速めて帰るみち月の光は白く照らせり

仙台市仮設住宅を見舞ふ

(平成二十四年)

禍^{まが}受けて仮設住宅に住む人の冬の厳しさいかにとぞ思ふ

沖縄県訪問

弾を避けあだんの陰にかくれしとふ戦^{いくさ}の日々思ひ島の道行く

明治天皇崩御百年に当たり

様々の新しきこと始まりし明治の世しのび^{みやび} 陵^{みづらぎ}に詣つ

祭文

われらここ、さねさし相模 丹沢の山脈^{やまなま}に連なる大山の麓・七沢の里に集ひ 第五十八回全国学生青年合宿教室を営みて

最後の夜を迎へり

今し天つ日は沈み 夕風そよく この合宿地のさやけき草原を 斎庭ゆにばと定め きよめまつり とこしへにみ国を守ります
遠おやつみ祖たち また み国のために尊きいのちを捧げ給ひしあまたの同胞はらからの み霊たまを招まぎまつり ながさめまつらむと
み祭り 仕へまつらむとす

願れば 過ぎし大御戦おみいくさに敗れし時ゆ 米国の占領政策及び東京裁判史観により 日本の文化・伝統は否定され み国の行
く末いよいよ險しく 危あやふき道をゆかむとすれど ひとへに

昭和天皇 今上陛下の御聖徳に導かれ み国のいのちは守られて来ぬ

しかれども まことに口惜しきことに おぞましき自虐史観は全国の津々浦々 はたまた教育 経済 政治 司法 マス
コミ等の各界にまではびこり 日本語は乱れ 道徳心は失はれ 国を護る気概は薄れ この有様に胸ふたがれ憂ひつきざる
日々とはなれり

うつしよは乱れ 東北大震災に遭遇したれども 言霊ことだまの幸まきはふみくにのいのちはたゆることなく 五十七年の年をかさね
しこの合宿教室に集ひしわれらもろともに 伊藤哲夫先生をはじめ諸先生のご講義に耳を傾け 大御歌を心に味はひ ある
いは古典の言葉に学び 時をおしみては 初めて会ひし友と 心を開きて語り合ひ 大山登山 短歌創作 班別輪読 班別
研修などを重ねつつ 日本の行くべき道を定かに見定めんと 心を合せて過し来たれるさまを 畏かれども いましみこと
たちみそなはし給へ

今よりのちは 大君のみことかしこみ かたしとておもひたゆまず つとめの庭に 学舎まなびやに はたまた教への庭に まご
ころの往きかふ道を拓きゆき 至らざれども み国のいのちを守らむとつとめて生きむと誓ひまつらむ。

天がける祖おやのみ霊たまよ

願はくは つとめいそしむ我らのゆく手を導きたまへ 守らせ給へと ここに この合宿教室参加者一同に代り 澤部壽

孫 謹み敬ひ畏み畏みも白ます。

講義

「思想の国柄―国民文化研究会の道統をたどる―」

中島法律事務所弁護士 中島繁樹 先生



国民文化研究会の前理事長、小田村寅二郎先生が若いころに体験された学問の内容をたどりながら、日本の思想の特徴がどこにあるかについて話をすすめて行かれた。

小田村先生が昭和八年、第一高等学校に入学し当時の学内サークル「昭信会」で学ばれたことは、聖徳太子のご思想と明治天皇のご思想だった。「聖徳太子の哀愍教化の思想と憲法十七条の思想は、今まで伝えられてきた日本人の特徴的な思考の様相を示すものであり、憲法十七ヶ条のうちの第一条（和を以て貴しと為す）、第三条（詔を承りては必ず謹め）、第十条（共に是れ凡夫のみ）は、特に日本人にとって大切な思考の原点であらう」と述べられ、明治二十二年に明治天皇が制定された大日本帝国憲法も、推古朝以来の国柄の伝統を引き継ぐものであったと、「祖宗の遺烈を受け萬世一系の帝位を踐み、臣民の康福を増進しその懿徳良能を發達せしめむことを願ひ、ここに大憲を制定す」との憲法公布の上諭を示された。

昭和十六年、「一高昭信会」出身のわが国文研の先輩達は、聖徳太子憲法の「共に是れ凡夫」の思想に裏付けられて、人間の不完全性といふ厳粛悲痛な事実認識に到達してゐた。「その先輩達は、戦争は不完全の人間が全力を傾けて遂行するものだから、すべからず戦争は短期であるべきであるとして、戦時下、高唱されてゐた『長期戦論』の誤謬を真向から指摘することになった」と、時代思潮の本質的問題点を別出した「国文研の道統」を説かれた。

全体感想自由発表

胸中の思ひを率直に語らうと登壇して語る参加者の言葉は、四日間の研修の確かな手応へと、今後への決意に充ち満ちてゐた。「国を思ふ同年代の人と話ができて嬉しかった」「日本人の思ひをたどらうとした班別討論が勉強になった」「これからもかういふ機会を求めていきたい」「武士道に興味を持った。日常生活で、礼儀・名譽・忠義を尽す場面は多く存在してゐると感じた。かういふ気持を持つことが日本の再生につながる」「大学や会社の理念に誇りを持つなど再生すべき日本は自分の中にあると思つた」「憲法問題に関心が無い同級生には、自分で勉強して芯となる言葉で語っていくことが第一歩と気づいた」「情緒が豊かになるので短歌を詠み続けていませう」「三十才になり決意を固めるために参加した。吉田松陰の義を正して利を計らずといふ言葉が胸に迫つた」「自分の世界が広がる合宿だった。慰霊祭を経験して日本のために命を捧げた人に忠義を捧げたい」「地方にゐるが全国の人と切磋琢磨していきたい」「人生と学問は繋つてゐる。人生を左右する言葉に出会ひなさいといふ言葉が心に残つてゐる」…。

閉会式

国歌斉唱の後、主催者を代表して磯貝保博国文研副理事長は「合宿教室で学んだことを深め、日本人としての自覚を高めて行って欲しいと思ふ」と挨拶した。続いて参加学生を代表して立命館大学二年藤新朋大君が「歴史を通して歴史上の人物と繋がり、歴史を共有する仲間と繋がり得ることを学んだ。これからも共に歴史を学んで行きませう」と挨拶した。最後に廣木寧運営委員長が登壇し、皆さんは歴史に日本の再生を学んだと思ふ。日本の歴史には汚名を着せられたまま亡くなった方々がたくさんをられる。その人達の、どうか日本の汚名を晴らしてくれ、日本人の正しい姿を後世に伝えてくれ、そう言ふ声が先生方の諸講義から、あるいはレジメの中から聞えてきたのではないですかと結んだ。そして福岡大学二年岡部智哉君が閉会を宣言して第五

十八回全国学生青年合宿教室の全日程は終了した。

助言者の紹介

(有)ラド

国民文化研究会名誉会長

小田村四郎

元小田原市立矢作小学校校長
元富山県立富山工業高校教諭

戸田 一郎
岩越 豊雄
岸本 弘
上木原 巖

国民文化研究会副理事長 (株)伊勢利代表取締役

上村 和男

元地方公務員

島津 正數

国民文化研究会副理事長 元 (株)講談社

今林 賢郁

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター
元地方公務員

井原 稔

国民文化研究会副理事長 元 日商石井 (株)

磯貝 保博

元神奈川県立小田原高校教諭

原川 猛雄

拓殖大学日本文化研究所客員教授

澤部 壽孫

特定医療法人原土井病院院長

小柳 左門

国民文化研究会事務局長

山内 健生

東京大学生産技術研究所

福島 義榮

(株)寺子屋モデル代表取締役社長

奥富 修一

公益財団法人交通事故総合分析センター理事長

伊藤 哲朗

元 (株)竹中工務店

山口 秀範

元福岡県立筑紫丘高校総括教頭

小田村初男

元新潟工科大学教授

稲津利比古

座間市立東原小学校教諭

小林 至

興銀リース (株) 執行役員

大岡 弘

(株)講談社

松本 洋治

日章工業 (株) 代表取締役

藤新 成信

鳥栖市シルバー人材センター

藤井 貢

昭和音楽大学名誉教授

國武 忠彦

羽後信用金庫石脇支店

西山 八郎

元日産自動車 (株)

古川 修

日本ユニシス (株) 北海道支店

須田 清文

元福岡県立直方高校教諭

小野 吉宣

(株)IHIEアロスベース

大町 憲朗

中島法律事務所弁護士

中島 繁樹

合宿運営委員長 (株)寺子屋モデル役員

内海 勝彦

元山口県立熊毛南高校教諭

寶邊矢太郎

若築建設 (株) 九州支店

廣木 寧

元中京コカ・コーラ

高村 光紀

神奈川県立小田原高校定時制

池松 伸典

(株)柴田代表取締役社長

柴田 悌輔

日産自動車 (株)

中村 正和

元厚木市役所

難波 浩

大阪湾広域臨海環境整備センター

奈良崎修二

元元崎重工業 (株)

山本 博資

出光興産 (株)

久米 秀俊

元 皇官警察本部

亀井 孝之

広島 秀明

I M Sグループ本部事務局 総合企画部

合宿運営副委員長

日本語教師

日本青年協議会

福岡県立鞍手高校教諭

千葉県木更津県税事務所

神奈川県立市ヶ尾高校教頭

熊本県立熊本高校教諭

福岡労働局

高知市立旭中学校教諭

アサヒ飲料(株)

日本青年協議会

東洋紡(株)

(株)寺子屋モデル講師

F T I コンサルティング

(株)ラック

警視庁

作曲家・桐朋学園大学音楽学部講師

(株)ロゼッタ

伊佐ホームズ(株)

西日本電信電話(株)

中外鉱業(株)

最知 浩一

北濱 道

スクイラチオテイ のり子

佐瀬 竜哉

日比生哲也

秋山 信之

大日方 学

久保田 真

古川 広治

岡 つぐみ

澤部 和道

外村 聖典

庭本秀一郎

横畑 雄基

伊藤 俊介

高橋俊太郎

大橋 広和

武澤 陽介

高木 雅史

小柳 雄平

武田 有朋

濱崎 史嘉

合宿運営本部

廣木 寧・秋山 信之
久保田 真・庭本 秀一郎

指揮 班

最知 浩一・池松 伸典・古川 広治
澤部 和道・武澤 陽介

医務 班

小柳 左門
奥富 修一・稲津 利比古・大岡 弘

事務局

山本 博資・島津 正數・西山 八郎
高橋 俊太郎・栗方 恵美子

小柳 辰介

春日高校 籐 啓太

写真 班

中澤 武之
平田 稔

記録 班

入川 智紀

慰霊祭協力

走り書きの感想文集

これは閉会間ぎはの一時間余で参加者全員に、三泊四日間の感想を走り書きで書いてもらったものです。「仮名遣ひ」は原文のまま掲載してあります。

なほ、各人の感想文の末尾に小さい活字で載せられてゐる和歌は、この感想文とともに提出された第二回目のものです。



第一班 男子学生

国柄に基いた憲法に改正しなければならぬ

(國學院大學 院 二年 相澤 守)

先生方の御講義を拝聴して痛感したのが、憲法改正問題についてです。現行の憲法は、私達の祖先がつくり上げてきた我が国の国柄、国史、伝統文化を無視し、国家の体をなからしむるものであることを、それぞれの御講義を通して理解することができました。特に天皇の規定については、伝統に根ざした天皇と国民との関係に全く触れてゐません。私は、このやうな憲法を改め、国柄に基いた国家の体をなすものにならなければならないと思ひます。

憲法を祖先の教へに基きしよまことに改めゆかむ

求めていたものがこの合宿にあつた

(大阪大学 経 四年 谷村 遼)

自分がまさに求めていたものがこの合宿にありました。海外で自分に自信を持つには、自分のルーツ、つまり日本人としての誇りを持つことが必要だと考えていました。その誇りをこの合宿で感じることができました。合宿中に御講義をして頂いた先生はもちろん、班別研修で共に議論した仲間にも

当に感謝の気持ちでいっぱいです。この経験を活かすため、関西に戻ってから、できる限り勉強会に参加して知識を深め、自分の行動に反映させていきたいと思ひます。全国にはまだ、以前の自分と同じ様に、日本人としての誇りを持ってないでいる学生がとても多くいると思ひます。この合宿で自分が感じた思いを周りの身近な人に伝えることが、今回の恩返しになるのではないかと考え、行動したいと思ひます。

先人の生き方仲間と学ぶ中我に湧き出づ大和魂

国柄を生徒に伝えられるような教師になりたい

(九州産業大学 経 三年 緒方雄樹)

先生方の御講義をお聴きして、改めて自分の未熟さを感じた。特に、庭本秀一郎先生の『武士道』や國武忠彦先生の『古事記』に関して、前に読んではいったものの、全く理解できていない状態であると痛感した。

また、今回の合宿は、中学・高校の社会の教師を目指す自分にとって非常に有意なものとなった。中島繁樹先生の御講義の資料の中に「日本の『国柄』にふさはしい『人柄』が現代教育の中に欠落してきてゐるやうに見受けられる」とあるが、私は、国史や公民の授業で、この国柄を生徒に伝えられるやうな教師になりたいと思つた。

この合宿を終えた後も、古典を読んだり、短歌を読んだりして、勉学に勤しみたいと思つた。

朝の集ひにて歌を唱ひて

我が故郷の先人作りし歌唄ひ詞に込めらるる想ひを感ず

(先人…里見 義)

この時に初めて知りし「冬の夜」心の底から感動覚ゆ
故郷を懐かしみつつ唄歌ひ我育ちし地に誇りを抱く

胸にこみあげるものがあつた

(福岡大学 経 二年 岡部智哉)

神武天皇についての御講義で、天照大神や月読命と聞いた時に、日本人であるからなのだろうか、何度聞いても聞きあさず非常に面白い内容でした。神であっても「いつてらっしゃい」などの人間味のある言葉を使っていたと聞いて、それ程遠い存在ではないのかと思いました。

十三日に祖父が亡くなり、遺品を見ると、祖父の兄達の遺影がありました。祖父とはかなり年が離れていて、まったく知らない人だったのですが、写真を見ると、額に「大日本帝国海軍」と書かれたハチマキをしていました。戦死したとのことでした。天皇陛下のために命をささげた方々がこんなにも近くにいたのかと思うと、胸にこみあげてくるものがありました。

ご講義のたびに友らと卓囲み偉人を語る集ひ楽しき

カメラ・レポート1



全国から集うた参加者は、それぞれの思ひを胸に受付を済ませ、開会式に臨んだ。

日本を守ろうとした先人達の必死な思い

(熊本大学 法 一年 浅山弘明)

今回私は初めてこの合宿教室に参加させていただき、先人達が日本を守ろうとしてこられた必死な思いを知ることができました。

私はこれまで日本という国の現在置かれている状況に目を向けることもなく、危機に面しているのだとしても他の誰かがやってくれるからいいや、というような他力本願な考えを持っていたように思います。しかし、今回先人の心を知ることができ、そのような考え方しか持てないようでは、先人の方々に対して大変失礼であることは当然、日本もダメになってしまうのだと思います。日本人であるという自覚を持ち、自分が少しでも日本を良くしていこうという意識を持って、これからの人生を過していきたいです。

我が国の先人達の声聞きて我が振り直せと心に誓ふ

内容の濃いものでした

(福岡大学 経 一年 木村太一)

一言でこの四日間に渡る合宿を表すと、非常に内容の濃いものでした。中学、高校と、多くの人達のように本気の受験勉強に取りくんだことのない私にとって、初めは人のお話しを長時間聞くのは苦痛で仕方ありませんでしたが、二日目の

夜のご講義あたりからしつかり集中し、話を聞くことができようになるようになっていました。それに驚くと同時に自分の勉強不足をひしひしと感じました。今までの私は勉強することから逃げていたと気づきました。班の仲間との意見交換、偉人の話、古典、神話などを聴き、そう考えました。「知行合一」この言葉のように、学んだことを毎日コツコツ実行へ移していこうと思えました。まずは日本の偉人を学び、自分の生き方を見つめ直し、よりよい人生を切り拓いていこうと考えました。

気づかざる我の甘さと不甲斐なさまたと忘れぬ日本の心

手紙に返事を出すことから始めたい

(日本青年協議会 佐瀬竜哉 49歳)

國武忠彦先生の御講義が心に残りました。「シラス」といふ言葉の意味として「相手、対象と一体となる」これが「知る」といふことである、といふ言葉がありました。本当に「知る」といふことは難しいことだと改めて知りました。國武先生はこれに関して「友達とつきあふといふことは簡単なことではない」とも話されましたが、つくづく自分は本当に人とつきあつてゐるのかと考へさせられました。以前長内俊平先生から「学問といふのは届いた手紙に必ず返事をする」といふことだ」と言はれたことがあります。返事を書くといふのは人づき合ひの根本であり、それこそまごころの発露だと思ふの

ですが、それができてゐない自分は、まだまだ学問ができてゐないと痛感します。この合宿を機に、もう一度、「知る」といふことを自分の実践の中から学んでいきます。

國武忠彦先生の御講義をお聞きして

古事ふることの文ふみにしるされし言の葉を生々と語らるるみ姿うましも

師の君の語らるる言の葉一つ一つ吾の心にしみとほりたり

吾もまた日の本に伝はる言の葉を喜々と語れる人になりたし

第二班—男子学生—

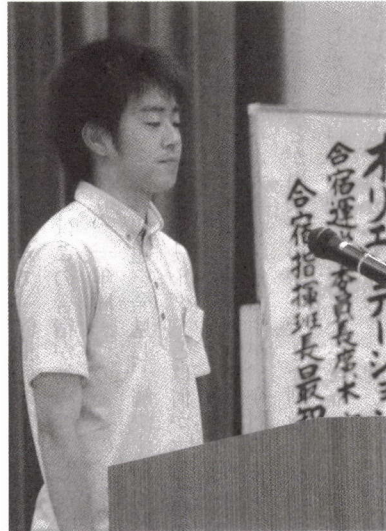
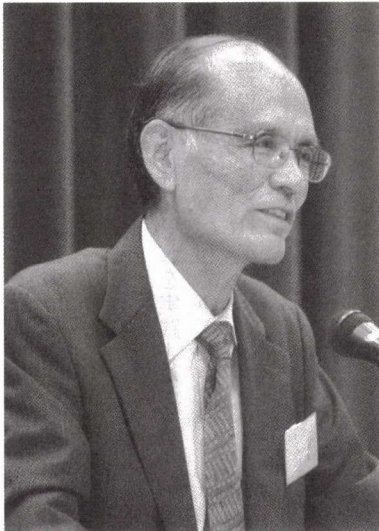
日常の判断が大きな決断につながる

(東京大学大学院 理 一年 高木 悠)

武士道についての御講義にも、中江藤樹の孝行に関する御講義にも、すべきことをすべきときにするといふ言葉があり、印象に残った。私の普段の生活でも、生死の判断は無いとしても、今喜ぶべきときか、友達にどういふ言葉をかけるべきかといふ「判断」は常に行つてゐる。

今回、班長をつとめさせて頂いたが、班別研修の進行では、今どういふ言葉を語りかけようかといった「判断」の連続であった。それを通して、まだまだ自ら語りかける言葉が貧弱であることを痛感した。もっと勉強したいと思ふと同時に日常の決断から始めて、大きな決断もきちっと出来る確固とした信念を持つ日本人になりたいと思ふ。

カメラ・レポート2



開会式。合宿教室は京都大学一年の安永知生君（右）の開会宣言で幕を開けた。主催者を代表して今林賢郁副理事長（左）は「敗戦後遺症を克服して生き生きとした日本を取り戻すために、国民一人一人、とりわけ若い学生青年の心の中に国を思ふ心を蘇らせたい。それが合宿教室を続けてゐる私共の願ひです」と述べた。

生くべきか死すべきかと判断も出来るを目指し心鍛へむ

同世代の友と日本について真剣に考えた

(熊本大学 教 四年 吉田 智)

今回、この合宿教室に参加させて頂き、素直に驚かされることばかりだったと思います。

講義や班別研修を通して、同年代の友人や先輩、先生方とこれほどまでに日本の事について考えた事は私にとつてすごく貴重な経験でした。特に、武士道についてのお話では、私がこれまで続けてきた剣道と深く通じるものを感じ、共感するとともに、このような類い稀に見る誇らしい文化を守らなければならぬと強く思いました。

一方で、諸外国の動きや憲法改正についての議論は私の中の一つの疑問として残りました。学習や知識不足を実感すると同時に、もっと学びを深め、自分自身の考えや思想をまとめていくことが必要であると思いました。

真剣に国憶ふ友と語らへば国への愛着心に芽生ゆ

武士道の精神は日常の生活で実践できる

(専修大学 法 四年 奈良崎恵祐)

今回の合宿では、庭本秀一郎先生の御講義に心を打たれた。日本の再生のために、今こそ「武士道」の精神を思ひ出さう、

といふ先生のお言葉が心に残った。そして、「武士道」の精神を実践する場が私たちの生活する周囲にありふれてゐる、といふことを、班別研修の中で発見し、理解できたことが何より嬉しかった。

礼儀・忠義・名誉といったやうな「武士道」を構成する精神を常に持ち続け、それを実践することで、これからの人生をより実りあるものにしてゆきたい。

武士道の精神こころに胸を打たれつつ日々に生かさんとしみじみ思ふ

日本について同世代の友と話せた

(福岡大学 経 三年 小林拓海)

私は二十年間生きてきて、同世代の学生と日本とはどういうものか話したのはこの合宿が初めてでした。大学の授業ではグループを作り、一年間一つの企業のインターンシップにいき、その企業の問題を発見し、解決するという活動をしています。そこでは、「リーダーとは何か」「問題の見つけ方」、「自分のグループ内での役割」などを語り合ってきました。それももちろん大事なことですが、今回のような国を想う仲間と話すことが出来たのが、大きな刺激になりました。

しかし、自分の勉強の足りなさを痛感し、先人への申し訳ない気持ちと、自分への悔しさと胸がいっぱいなることもありました。今回の合宿で感じたことを思い返しながら福岡で勉強していきたいと思います。

祖国憶ふ先人の心を知るほどに己の無学を悔しく思ふ

参加者と歴史を共有した

(立命館大学 文 二年 藤新朋大)

私は自ら大学でも歴史を学ぶ身ではあるが、合宿教室の参加者の多くはさうでは無い。しかし、過去を学ぶ姿勢は共通してゐた。私たちは同じ歴史を共有し、それによってつながることが出来た。その方法として、私たちは「古典」を読んだ。それは同時に過去の人々に心を通はせることでもあった。

ただ、ここにいささかの問題が感じられたと私は思ふ。難しい御講義が伝はらないことがあるのだ。今まで何も学ばずに初めてきた仲間には、本当に内容が伝はったのかと感じられた。この点に関しては「知らない者でもわかるやうに」御講義されますやうに願ふところである。

大山阿夫利神社下社に歩き詣で疲れ果てて

ケープルカー我は乗らじと厳しくも険しき道を歩き登れり

大山の名水を汲み頂けば我が心まで潤ひにけり

水飲んで暗き神社の裏行けば神いますかと感じられたり

班の友達と打ち解けられた

(福岡大学 経 二年 立川謙志郎)

初めて参加でとても緊張していましたが、班員や友達と仲

カメラ・レポート3



開会式。参加学生を代表し、東京大学大学院一年の高木悠君(右)は「班員、講師、さらには先人の言葉に耳を傾け、しっかり取り組んでいませう」と呼びかけた。廣木寧合宿運営委員長(左)は、ここで学ぶ歴史は暗記物ではない。先人の言葉に学び、その魂に触れる歴史だ。歴史の大海は皆さんを溺れさせず、伸び伸びと泳がさうと待ち構へてゐる。楽しく学んでほしい、と参加者に語りかけた。

良くなり、とても良かったです。大山登山もとても良い体験ができ、非常に楽しかったです。また機会があれば参加したいと思います。

自分の考えを伝える難しさを知った

(福岡大学 商 一年 藤 武史)

初めてこの合宿に参加して、自分が考えることを伝える難しさを知りました。班別研修で班員が自分の考えをしつかり発言しているのを聞いてとても驚きました。

講義では大学では聞けない話を、たくさんの先生方がして下さったのは貴重な体験になりました。古事記の話や憲法の話が印象的でした。創作短歌全体批評で皆の短歌を見て自分の感情をよく表しているなど思いました。今回、初めて短歌を作ったけれど上手に出来て良かったです。

この合宿に参加して、短歌を作ることの難しさや自分の考えを述べる難しさを知ったり、慰霊祭を経験したりと、とても貴重な体験ができ、自分のためになりました。これからのいろいろなことに生かしていけたらと思います。

班別研修にて

考へや感ぜしことを自らの言葉で語るは難しと思ふ

学ぼうとする友の姿勢に刺激を受けた

(亜細亜大学 法 一年 最知雄飛)

とても充実した日が送れたと思います。全国各地から勉強意欲が高い人が集まり、講義を聴き、そのことについて語っていることが、何より普段の生活ではない経験なのでとても感心しました。話の内容はあまり理解出来なかつたですが、今回の経験を生かし、来年も機会があれば参加したいと思えます。

父親に言はれて参加せしもの多くを学び刺激受けにき

語り合ふ学生の姿を心強く思った

(公益財団法人交通事故総合分析センター 小田村初男63歳)

今回の合宿教室では、男子学生班の班付きの任務を荷ひました。自分の意見、目的を明確に持って参加した学生、何となく参加した学生と様々でした。最初はぎこちなくとも講義と班別研修の組み合わせの中で、徐々に打ち解け、初めて聞く内容に戸惑ひや感動を覚えながら意見を出し合ふ姿を心強く思ひました。短歌も相互批評の中から、最後は自らの思ひを歌に詠んでをりました。

先生方の御講義も我国のありやうと憲法改正問題に焦点があたつてをり、理解を深める上で大変有意義でありました。

合宿に集へる若きらの生き生きと語り合ふさま見るも嬉しき

第三班—男子学生—

向学心を手に入れた

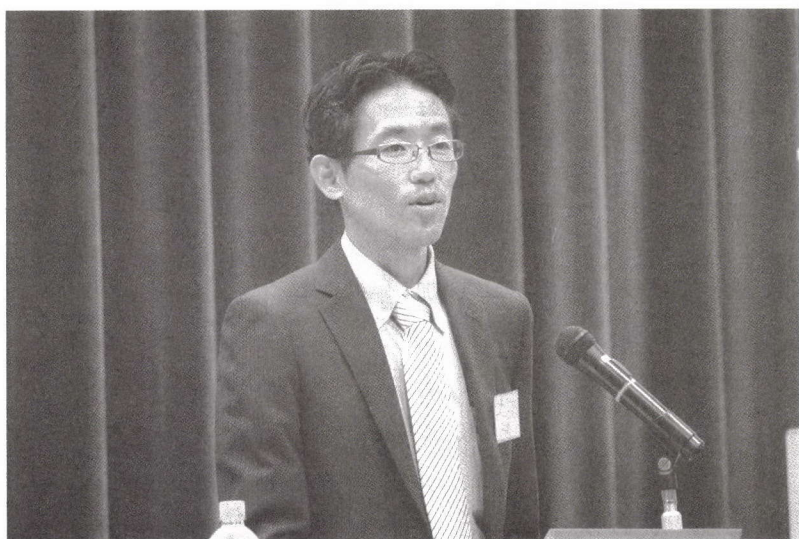
(大阪大学 経 四年 青野 遼)

二回目の参加となった合宿教室ですが、一度目に比べて素晴らしく充実したものであると感じました。一度目は、講義、体験ともに、新鮮なものばかりで、和歌の素晴らしさ、天皇の尊さといったものは心動きましたが、今ひとつすべてを吸収するに至らなかった。しかし、今回は、前回の体験もあつてか、先生方の話されること、班長や班付の方がおっしゃること、もちろん班友の言葉も新鮮さを保ったまま、体に染み入るのを感じました。そして、その中で前回の合宿では得られなかった向学心というものを手に入れられ、満足感も得られたのだと思います。内容もテーマも三泊四日で理解できることではないし、時間をかけて何度もかえりみることで徐々に染み入るのだと感じます。これからも機会があれば参加したいと思います。ありがとうございます。

先人のことをたどり奮ひ立つさらに知りたし大和のころ

とても満足のいく四日間だった

(神奈川大学 法 四年 市川 絢也)



カメラ・レポート4

合宿導入講義。『再生すべき「日本」とは何か—「武士道」を通して考える—』と題し、東洋紡(株)・庭本秀一郎先生は、新渡戸稲造の著書『武士道』について語られ、そこに掲げられた徳目は私達の価値観の中にも生きてあるとして、吉田松陰の『講孟割記』の一節から「忠義」が命をかけて実行されてきたことを説かれた。

初めて参加した合宿は講義内容が難しくなかなか理解できませんでした。しかし、今回は全ての講義内容がとても興味があり、身を乗り出して聴いていました。

なぜ今回は興味を持ち聴くことができたのか考えたところ、一番の要因は毎月行われる勉強会の結果ではないかと思えます。勉強会で主に取り扱った吉田松陰は合宿でも多くの場面で取り上げられており、興味を持たせる結果となりました。

今回の合宿で得たことはいくつもあり、とても満足いく四日間でした。合宿を開催するにあたりご尽力くださった運営委員をはじめとする皆さんに感謝したいと思います。

四日間共に学んだ仲間達と次に会ふのはいつの日ならむ

心に訴えてきた講義

(中央大学 文 四年 廣木摩理勢)

「この合宿で学ぶ『歴史』は、学校で教わってきた歴史と全く違います」、運営委員長のこの言葉にある「違い」が今回の四回目の合宿で明瞭になりました。この合宿で行われる講義のほとんどが私の心に訴えてくるものでした。学校での授業は私の頭に訴えるものと気付きました。その典型的な例が和歌です。学校では、その作りや技巧など頭で理解できるように教わり、それをどのように感じるかは教わりません。合宿ではむしろそこに重点が置かれ、私の心に訴えてきました。他のどの講義もそうだったことを今改め

て感じています。心に訴えられることに慣れていない私たちは初め困惑し、何を言われているのか分からなくなり、しかし、一度感動を覚えれば永遠に残る大切な記憶となるに違いありません。これが四年間かかって思い知ったこの合宿教室が持つている大きな魅力だと思います。このような心に訴えてくる『歴史』の講義を受けることができたことは、今後の生き方に大きな影響を与えてくれると感じています。

荒波のごとき行く末を導くは猛き心の日本人ならむ

参加できて本当に良かった

(追手門学院大学 社会 二年 絹田 暁)

前回に続き二回目の参加となりますが、少し慣れてきた感じになりました。普段、友達同士でも家族でもこの合宿のようないまじめな話をしないので、最初はとても難しかったです。しかし、今回の二回目の参加で今の日本の現状がよく理解できました。歴史の方は勉強不足で何が何だかちんぷんかんぷんですが、そこは勉強すれば何とかなると思うのががんばろうと思いました。今回の合宿は、前回出会った人と何人か再会できて、とても楽に落ちついて講義に取り組むことができました。とても時間が経過するのが早く感じました。この合宿に参加する理由は、就職までに少しでも多くの事を学んでおきたいのと周りの人から何かいいところを自分のものにしてきたらいいなと思ったからなので、今回参加できて本当に良

かったなと思いました。

良き友と再会できた合宿は時の流れが早く感じる

日本人として誇りをもって生きていきたい

(福岡大学 経 二年 池田拓輔)

今回の合宿で、自分の生き方について考える良い時間となりました。先生方のお話を聞き、深く考えさせられるものがあり、考え方が変わりました。中でも、明治憲法は素晴らしい憲法だったということに驚きました。学校で教わる明治憲法は、あまり良いイメージではないものでしたが、明治憲法の本当の意味を知ること、素晴らしいものだと思えることができました。

この合宿で、日本人は素晴らしい心を持っているということを実感しました。これからも日本人として誇りをもって生きていきたいと思えます。

神奈川の厚木の地にてとりもどす日本の心素晴らしきかな

体が熱くなった

(拓殖大学 政経 一年 大貫大樹)

山内健生先生に誘われて参加をした。一日目は若干の不安があり、班別研修にも慣れておらず、残りの三日間大丈夫だろうかと思った。しかし、講義はどれも私の関心ある題目は



カメラ・レポート5

『近隣諸国の動向と日本国のありやう』と題して、日本政策研究センター代表・伊藤哲夫先生は中韓両国の筋の通らぬ日本への態度を批判された後、我が国の明治の先達が思想の混乱の中でいかに本来の日本の国柄に戻したかを「五箇条の御誓文」と「教育勅語」を読まれつつ説かれた。

かりで吸い込まれるように先生方のお話に聞き入り、体が熱くなった。「私が学びたかったものはまさにこういうものだ」と感動し、胸の中の高まりから体が熱くなったのだと思う。

慰霊祭は印象深く、和歌朗詠は目を閉じながら聞き入っていると、これもまた胸が熱くなり涙がこみ上げてきた。私は初めての経験であり、厳肅な雰囲気になり飲みこまれたのかもしれないが、この感動を決して忘れてはならないと思った。この貴重な私自身の心の動きを体感する事が出来たのも本合宿のおかげである。今、山内先生にとっても感謝している。

慰霊祭の和歌朗詠に胸打たれ忘るることの出来ぬ夜となりぬ

ぶれない信念を持ちたい

(福岡大学 経 一年 田中京介)

講義で自分が一番印象に残ったのが武士道と天皇に関してでした。命を犠牲にしてまで守り抜くものが先人達にあったというのが驚きでした。命を犠牲にするという事はそれなりに何か強い信念があるからだと思います。自分もそのぶれない信念みたいなものを持ちたいと思いました。天皇についてのご講義に関しては自分で古事記を勉強してみたいと思いました。

「信実と誠実となくしては、礼儀は茶番であり芝居である」、この合宿で一番心に響いた言葉です。これを自分のなかに落とし込んで理解し、自分の気持ちも混ぜながらバイト先の塾

の生徒に礼儀というものを教えられたらなと思いました。やはり一度ではこの合宿のご講義を理解できません。来年も来たいと思います。

先人が持ってたやうな信念を我もいつかは見つけ出したし

付き合ひを深めてゆきたい

(興銀リース(株) 小柳志乃夫 57歳)

庭本秀一郎さんの知行合一を求め、自らの勤務経験を通して「忠義」といふものに迫らうとする姿勢に感銘を受けた。國武忠彦先生は「物の味をなめて知る」といふ知り方の話されたが、いづれも対象と深く付き合ひ、交はる中で、体で知ってゆくやうな「知」であらうと思はれる。さういふ知の経験がいかに薄くなつてゐる。学生との付き合ひでも、古典を読むうへでも、或いは日常の中でも、付き合ひを深めてゆく努力が必要だと改めて思った。

廣木寧運宮委員長以下運宮委員諸氏のご努力をありがたく思ふ。運宮委員長挨拶は圧巻だった。

慰霊祭後の懇談で大貫大樹君の感想を聞きて

ますらをのかなしきいのちの朗詠に知らず目頭あつくなりしと

歴史に生きること

(日本青年協議会 外村聖典 38歳)

「歴史に日本の再生を学ぶ」という合宿テーマが大変良かった。それは、我々一人一人が歴史に生きる事だと実感した。山口秀範先生のお話で、中江藤樹が『大學』の文章によって学問の志を奮起する姿に感動した。奮起した言葉は「天子より以て庶人に至るまで、忝是に皆身を修むるを以て本と為す」であり、凡夫である藤樹自らも聖人に至る道があると信じる事が出来たのだと思う。先人の心が躍動した言葉に、我々も触れて躍動することが、歴史に生きることであり、歴史が自らの力になることだと思ふ。

「いのちささげて」の茶谷武命（みこと）の言葉が合宿で甦ってきた。「身は朽ちるとも歴史に知己を求め後世その価値を知る人が、その志をうけついでくれるならば、男と生まれてこれにこしたことはないと思ふ。」歴史に生きたときに、このような力強い言葉が吐けるのだと思った。そのような確信を与えてくださった合宿に感謝したい。

言の葉に振ひ立ちたる先人も身をば修めて聖人にならんとす
先人の息吹感じて我もまた歴史に生きる人となりなむ

第四班 男子学生

同じ学生に語りかけてゆきたい

（専修大学 経営 二年 声田和久）

私自身対外関係、国防問題について興味、関心があるため、

カメラ・レポート6



伊藤哲夫先生はご講義の後、班別研修にも顔を出されて学生らの質問に真摯に答へて下さった。

二日目の伊藤哲夫先生のお話はとても注意深く聴かせていただいた。中・韓両国の歴史認識に対する問題で私は二国に対する憤りとともに、この問題で揺れてしまう日本の歴史に対する知識不足、自分の国に対する誇りを持っていないなどの問題を変えるためには、どうすればいいのかと思うようになった。そして今、私達学生はこれらの問題に対してどう動けばいいのか。私は伊藤先生のお話である指針を得た。私自身がしっかりと学び、同じ学生に語りかけていくことが、一番の方法なのだ。私は今後も大学内で友人達に語りかけてゆくように心掛けたい。

全国の友らと共に学びけり国の始めの人の指針を

本当の日本人になることを心がけたい

(大阪大学 経 四年 岩井中健)

今合宿の間、私が心を悩ませたことは、日本再生のために私にできることは何か、ということでした。班別討論を通して気が付いたのは、「自分の身の回りから変えていけば良い、少しずつであっても必ず成果は出る」ということです。ここ最近、私はワークキャンプというボランティア活動に国内・海外と参加し、何人かの外国人と出会う機会を得ました。彼らのほとんどが日本に良い印象を持っていて、いつか日本に行きたいという言葉聞くことができました。私にできることは、そのような身の回りの外国人に対して、正しい日本・

日本人を示すことだと思えます。そのために、私はこれからも国文研での学びを継続し、本当の日本人になることを心がけたいと思います。

日の本を取り戻すため真なる日本人にまづ成りぬべし

講義や班別研修が身についていると感じられた

(福岡大学 経 四年 西脇悠平)

今回この合宿教室に参加するのは二回目でしたが、前回同じ班だった友達と再会できた喜びと学生体験発表を控えた緊張で胸が張り裂けそうでした。日が近づくにつれ胸の高鳴りが強くなる中で、友達や先輩方にアドバイスをいただき、なんとか本番で発表することができました。

発表中は緊張でほとんど覚えていませんでしたが、終わった後多くの人から「発表良かったよ」と言っていただし、とても嬉しかったです。

今回の合宿でもとても強く感じたことは、前回はわけもわからず流されているだけだった講義や班別研修が、しっかりと身についていると感じられたことです。勉強が足りない部分もあったので、これからしっかりと学んでいこうと思えました。友だちと共に過ごせしこの日々は身に積りゆき思ひ出となる

先人方に恥じない日本を築きたい

(九州工業大学 工 一年 梶栗正大)

今回この合宿に初めて参加させて頂き、改めて日本の伝統文化のすばらしさを学ぶことができました。そして庭本秀一郎先生の講演を聞き、先人の方々が築き守りぬいてこられたからこそ、今の平和で繁栄した日本が存在することを実感しました。私達日本人は、先人方への感謝の気持ちを忘れることなく、先人方に恥じない日本を築いていかなければならないと強く感じました。

偉人の素晴らしさ

(福岡大学 経 二年 田中貴大)

私は今回の合宿に参加して感じたことは、偉人の素晴らしさや昔の出来事を深く知る楽しさです。様々な偉人達が残した言葉の意味などを知ることができてよかったです。また、小・中・高で習った歴史がどんなに薄いかを感じました。私は戦後の日本の歴史は嫌いでしたが、今回の先生達の話聞いていくうちに興味ができました。

今後も勉強していきたいと思いました。

この夏に出会ひし友と語りあひまたの再会期待し別れる

カメラ・レポート7



短歌創作導入講義。大阪湾広域臨海環境整備センター・久米秀俊先生は、感動をありのままに言葉にすることの大切さを説かれ、正岡子規と弟子の伊藤左千夫の短歌のやり取りを紹介された後、短歌を詠み交はすことで生涯の友や師を得ることができるのではないかと述べられた。

勉強に励みたい

(宮崎公立大学 人文 一年 田中亮佑)

今回の合宿に参加して、正直、とても焦りました。意識の高い学生や会員みなさんに囲まれて自分の力のなさを痛感しました。また、違和感を感じたときも、自分の知識不足で反論することができませんでした。しかし、自分の力のなさを知ることができたおかげで、これから勉強に励みたいという志ができました。新たに出会った友と共に学び合って、自分をさらに高めていきたいという決意ができました。これからの私の勉強の基礎になるような合宿でした。

大海をさまよ泳ぐ我が姿勢ちます恩師にはやく見せたいし

「人間の不完全性」の思想

(北濱 道 51歳)

中島繁樹先生の御講義「思想の国柄」で指摘された、人間は完全でありうるという誤謬は、今も至るところで私達の健全な思考を奪つてゐると思つた。現在の立場から過去を裁くといふ論調の軽薄さも、元を辿るとこの考へから来てゐると思ふ。自分の実感に正直にものを言ふことに努め、「人間の不完全性」の思想といふものを取り戻したい。

國武忠彦先生の御講義

天皇の「しらす」てふお姿を神話を辿り説き給ひけり

「国民の期待に応へ」とのお言葉に大御心を偲びましけり

(今上陛下のお言葉)

国民のうへあたたかくしろしめす大御心に胸あつくなる

ともに学び、先人の思いを受けついでいきたい

(原土井病院 小柳左門 65歳)

四班の皆さん、ありがとう。しかし十分話を聞くことができず、ようやく話ができるようになった頃には、合宿も終りに近づきました。一生は長い。これから沢山学び、よき友を得て、素晴らしい人生を過してほしいと思います。

この日本には素晴らしい先人がのこした素晴らしい言葉があります。ともに学び、その願いを受けついでいきたいと思ひます。

慰霊祭の夜

夕暮れし集ひの庭の草むらにこほろぎは鳴く声もきよらに
をちこちに鳴く虫の音のひびきあひ七沢の森に秋は近づく
降りたりし雨もやみたる夜の空雲間にひとつ星の輝く
近きましし人の面影しのびつつ頭をたれぬ神の齋庭に

第五班—男子学生—

忠義を尽くした先人を愛したい

講義では、庭本秀一郎先生のお話が心に残りました。「再生すべき日本」は、自分の「中」にあるという話を聞き、歴史はまさに己の内面に存在していることを感じました。というのも、武士道の「義」や「礼」や「忠」という考えは、今の我々の中にもかすかすかもしれませんが確かにあります。先人は、忠義を尽くして愛する日本を守られました。私は、そのように忠義を尽くした先人を愛したいと思いました。

先人達が守ろうとしたものを守らねばなりません。しかし、まだそれがはっきりしていません。先人の生き方を知ることが、先人の守りたいものを守る一助になると思います。知ることには行うことです。すでに「行」は始まっていることを自覚し、行動を完結させる生き方をしたいと思いました。

武士道は我が真心に眠りしか揺さぶり起こさむもののふの心
神々に忠義を尽くす日の本の大和男子を目指し進まむ

「原典」を実際に自分の目で読み、味わいたい

（京都大学 工 一年 安永知生）

この合宿について親から勧められ、参加しました。現代までの日本の歴史が歪められ、神話が軽視されていること、自分たち日本人が日本人として誇りを持てるような正しい歴史認識が希薄になっていることを、数々のご講義をお聴きして再認識しました。しかし、それ以上に自分の中で何かもの足



短歌創作を兼ねた野外研修。関東総鎮護の大山阿夫利神社（下社）を散策した。

りないもの、腑に落ちないものを実感することができました。それは、「原典」「原著」を実際に自分の目で読み、自分で味わうことでした。講義の中で扱う原典、原著は、数に限りのある一部のものでしたが、僕の魂に直接何かを訴えかけてくるようなものばかりでした。中には、難解な文章も存在し、合宿中では解決できなかったものもありましたが、それはそれで次の段階のための良い題材となるものであると思います。

最終日の朝

雨降れば山にかかりし白き霧美しきかな寒さありつつ

自分の思いを素直に歌に詠むことができた

(明星大学 情報 三年 岡松 優)

講義では、庭本秀一郎先生の武士道の精神のお話、伊藤哲夫先生の正しい歴史認識、日本の素晴らしさなどのお話、山口秀範先生の生き方のお手本となるような人を見つけ学ぶことのお話、國武忠彦先生の歴史の中で天皇をわかっていくことのお話、中島繁樹先生の日本の国柄を考えることのお話など、多くのことをお聴きし、学ぶことができました。

今回の合宿で、特に良かったところは、短歌創作でした。

前回の合宿では、難しい言葉など知りもしないのに使い、かっこよく作ろうとしていました。今回は、大山散策の時に思ったことを、素直に自分の知っている言葉で表現しました。そして短歌全体批評の時に須田清文先生から私の歌が読まれ、

良いですねと言われた時、とてもうれしかったです。

大山下山の折り

下山時に店に立ち寄り味はひしとうふアイスの心に沁みぬ

短歌相互批評を通じて人の感性の多様さを知った

(京都大学 経 三年 山内 遼)

詠んだ歌を班で批評し合うやり取りが特に印象に残りました。

熟練した方々に自分や他の人の詠歌を直してもらうと、少し語彙や文の形を変えることで、とても洗練されたわかりやすい歌に生まれ変わることを思い知らされました。自由な創作だと言っても、既存の歌を学ぶ努力をすることで、向上の余地があるということもまざまざと体感させられました。しかし、一方で、短歌創作には答えがないですし、人の感じ方は様々ですから、修正が受け入れられないなど、個々人のこだわりがあるということも再認識させられました。人の感性が多様であることを改めて肝に銘じ、それを受け入れる謙虚さと寛容さを涵養すべく、精進をしてゆきたいと思います。

どこにでも神坐しますと信ずれば現るらんか念じし御魂

日本の歴史を考える上で新たな視点ができた

(筑波大学 人文 二年 下村貴宏)

初めての参加でした。紹介していただいた高校時代の恩師は、日本史の先生ですが、日本の歴史を学ぶ上で、必ず役に立つことが学べると言われた通り、自分の中で、日本の歴史を考える上で新たな視点ができたように思います。また、様々な地方の大学生と親しくなれたことが貴重な経験でした。

特に印象に残っているのは、慰霊祭のあとの班別研修の時の久米秀俊さんと岸本弘さんの話です。自分は慰霊祭を身近なものとして捉えられなかったので、国のために死んでいった人々や亡くなった身近な人々を思い浮かべながら真剣に取り組んでいた方々に本当に申し訳ないと思いました。

この合宿では、班別研修の時に学ぶことが多く、まだまだ勉強しなければいけないことがたくさんあると痛感しました。合宿で学んだことは数知れずたくさんあった六時の起床

普段では体験できないことを体験できた

(福岡大学 経 二年 三谷晃希)

今回、初めて合宿に参加して、普段では体験できないようなことを体験することができました。特に、山登りや短歌創作では、とても良い体験ができました。

また、班別研修では、自分の意見を出して、班の人の意見を聞くことで、こういう考え方があるのかと考えさせられるものがありました。とても良い合宿になったと思います。

ありがとうございました。



カメラ・レポート9

古典講義。(株)寺子屋モデル代表取締役・山口秀範先生は、「身を修むるを以て本と為す一先人に習ふ生き方」と題して『論語』の一節を取り上げられ、「学ぶ」とはすなはち歴史上の立派な人物に「真似る」ことに通ずると述べられた。そして、学生諸君に対して自分探しではなく、良き師を求めて歴史上の偉人の生き方にお手本を見出し、それを真似ることが大切だと語られた。

学び舎に帰る頃には変化した自分の意識自分の考へ

原典の味読に基づく学問を続けたい

(大阪湾広域臨海環境整備センター 久米秀俊 56歳)

孔子、曾子、中江藤樹、熊沢蕃山とつながる学びの連なりを生き活きと姿が浮かぶがごとくに語られ、「君たちにその学問の出会いの機縁をつかんでほしい」と訴へられた山口秀範先輩の迫力のあるお話が強く心に響いた。生涯を賭けて取り組む甲斐のある偉人に学んでゆきたいし、まだ、私の知らない多くの偉人に出会ふべく研鑽してゆきたい。

また、「知らず」と「うしはく」の違いについて知識としては知ってゐたが、今回、古事記、日本書紀の原典を繙かれて、「国生み」、「天孫降臨」の原初の頃から、「知らず」「言向け和す」といふ言葉に何はれるやうに、心の繋がりが大切にされてきたことを國武忠彦先生にお話いただき感銘を受けた。

かうした原典の味読に基づく学問を友らと続けて行きたい。

山口秀範先輩のご講義をお聴きして

先人の学びの志定められし機縁の御話に引き込まれゆく
蕃山の師を得られたる縁となりし馬夫の話の面白きかも

原典をたどりにて縁語らるる先輩の話し振りに情景つばらに
学生に学ぶ機縁をつかめよと語らるるみ声の力強しも

新しい友に出会い交流を深めることができた

(元富山県立富山工業高校教諭 岸本 弘 68歳)

合宿参加の目的の第一は、新しい友に会い交流を深めることにあったので、そのことは班別研修を通してまづまづ達成されたと思ふ。四日間といふ時間の中で、お互ひに心を傾けたからであらう。

ご講義等で多くの課題を投げかけていただいたが、具体的に憲法のあり様を考へる上においても、そこにしっかりと「日本」といふものの存在を見失はずに考へることの大切さを再認識させられたと思ふ。

さて、この合宿の存続を含めて、自分は国文研会員の一人として何をすべきか、合宿に向ふ日々には思ひ続けたことの一つ一つを具体的に形のあるものとして行つてゆきたいと思ふ。

朝な夕な間近く立てる鐘ヶ嶽を仰ぎつ合宿の時を過せり
如何ならむ思ひにまさむ合宿にみ振り賜ひましし津軽なる師は

第十一班—女子学生—

日本の国を素直に仲間と語り合えた

(アメリカンスクールインジャパン高等学校二年 スカイラチオティ茉莉菜)

今回が三度目の参加となりました。今年もまた先生方の素

晴らしいご講義を聞き、新しい仲間と語り合うことができ、とてもありがたく思っています。

私が合宿にきて毎回感じるのは、同じ志を持った人々と共に学び、話し合えることの喜びです。私は普段アメリカンスタイルに通っています。日本の話題になると「それはおかしい。間違っている」と思う発言が数多くありますが、反論したいと思っても自分の知識が不十分なのもあるし「何か言っても理解してくれない」という気持から素直に自分の意見を言えずにいました。

ところがこの合宿では、日本の事が大好きで、日本の事をもっと知りたいという人々が集まっています。ここは私にとって唯一自分と同じような考え方を持った人たちが沢山いる場所だと感じました。今年もそんな素晴らしいところで日本の国を考えながら素直に仲間と語り合えて、本当に幸せだと思いました。ありがたうございました。

友達とわが胸内を語らへば心は近づき嬉しかりけり

子供たちに日本の伝統や誇りを伝えていきたい

(九州工業大学 工 二年 高野真理)

今回初参加し、日本人として誇りをもてるような話をたくさん聞けて大変よかったです。

大学では日々、勉学とサークル、友人との遊びなどでこのまま四年間を過ごしていくものかと考えていたところでした。

カメラ・レポート10



合宿三日目。『古事記—神武天皇—』と題し、昭和音楽大学名誉教授・國武忠彦先生は、初めに「古事記を読まずして天皇はわからない」と述べつつ、『古事記』の天孫降臨・国譲り・御東征に触れる中で「言向けやはす」とは単に「征伐ではなく、言葉でこちらに向けさせる。道理を正して相手を帰服させていったことを意味する言葉だらう」と語られた他、天皇と国民の深い心の結びつきについて話された。

私は日本が技術大国であることから伝統技術なども絶やしてはならないと考えていましたが、この合宿で日本について多くの事を学んだことで、逆に自分より年下の子や今から生まれ、誇りを持ってもらいたいとの気持ちが強くなりました。成人になる前の分岐点にいた自分にとって今回の合宿は多くのアドバイスをくれました。初めて出会う多くの人と話させて頂きとてもよかったです。ありがとうございました。

恩師より導きありし七沢でよき友出会へりこれも縁かな

これからに生かせる三泊四日だった

(中村学園大学 栄養 二年 矢羽田 葵)

今回初めて参加しました。来る前までは不安なことばかりでしたがいざ来てみて、まず講義を受けた時に、今まで受けてきた授業とは全く違い、深く考えさせられる内容で大変驚きました。同時に何故今までのように面白い授業がなされなかったのかと悔しく思われました。その後の班別研修では、日が進むにつれて皆からの意見も増え、とても有意義なものとなりました。普段の生活では憲法の話や歴史について自分の思いを互いに語り合う機会は全くなかったため、とてもうれしく楽しかったです。

また、大山散策で班の友人との仲がぐっと近づいたように感じ、短歌相互批評でもともに考えて頂き、美しいものができ

ました。とても短く充実した三泊四日を体験することができ、これからに生かせる時間となりました。

降る雨の音のみ響く班室に過ごせる友との別れ哀しき

「出会い」を大切にしていきたい

(中村学園大学 教 二年 古賀明香里)

初めて合宿に参加しました。講義は有意義なものでしたが、班別研修で年上や同じ年代の方々の考えや思い、また、私が考えていない意見も多く聴くことができて更に考えが深まりました。短歌や慰霊祭なども貴重な体験でした。

私はこの合宿で自分自身がどれだけ無知であったかを改めて感じました。そして、中江藤樹と『大學』、熊沢蕃山と中江藤樹の出会いのように、自分自身の運命を変えるかもしれない「出会い」を大切にしていきたいと思います。合宿で様々な人に出会い、自分の考え方、生き方を改めて考えさせられるものとなりました。これからも自ら行動し思いを話す機会をもてたらと思います。

振り返る友と過ごせし四日間いと有難き日々となりけり

充実した時を過ごすことができた

初めて参加しとても充実した時を過ごすことができました。

(学習院大学 文 二年 富永曜子)

沢山の講義の中で特に心に残ったことは和歌についてです。古事記の「知らず」という言葉から、日本人は言葉によって人を導き、言葉をとでも大切にしてきたことが分かりました。それは国文学を学んでいる私にとつても嬉しいことでした。日本人が昔から持ち続けた「言葉へのこだわり」を私も持ち続けたいと思いました。そのためには人、古典の中の言葉、いい経験との出会いを求めて大切にしていきたいと思っています。また、和歌で自分の心を率直に表現するためにも、周りに素直な愛を持った目を向けていきたいです。國武忠彦先生が御講義の中で「揺れ動く心、ありのままの心を真心といふ」と仰いましたが、真心を持って物事を見つめて、一日一首詠んでいきたいと思えます。

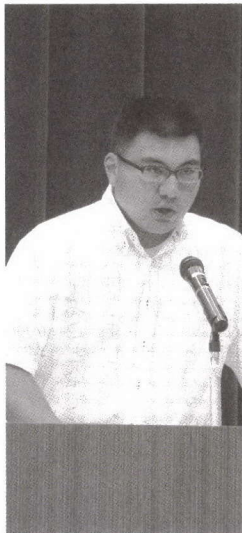
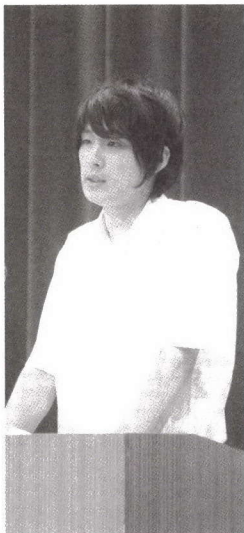
朝もやのかかれる青き山見れば魁夷の絵画思ひださるる

『古事記』を大事に読みたい

(東北大学 理 二年 工藤真秀子)

今回初めて参加しました。短歌や歴史は積極的に学びたいものではなかったのですが、講義での『古事記』の話は面白く、短歌相互批評は思いのほか楽しかったです。

『古事記』には自分の名前の由来となる一節があり親しみを感ずるものがありました。少し内容を聞いた程度で、むしろ、神話と歴史が混在し史料としては不信感のようなものがありました。しかしこの合宿で、「ウシハク」と「シラス」



学生発表。國學院大學大学院文学研究科二年・相澤守君(写真右)は初めて参加した合宿教室で、昭和天皇の終戦時に国や国民を守らうとされた御製に触れて感動した体験を、福岡大学経済学部四年・西脇悠平君(写真中央)は宮本邦彦警部と野村望東尼のように誰かのために行動できる日本人になりたいという決意を、大阪大学経済学部四年・岩井中健君(写真左)は吉田松陰の生き方を知り、社会にいかに関与できるかを考えることの重要性に気付いた体験を語った。

という支配についての考え方の違いや、本居宣長が成し遂げた事などを学び感慨深いものがありました。『古事記』は日本そして自分自身のルーツとして大事に読みたいと思います。偉人伝古事記の話も聞き飽きて物の理^{ことわり}学ばんと欲す

「食^{をす}」といふ言葉に目開かされた

(株)I H I エアロスペース 内海勝彦 58歳)

「歴史に日本の再生を学ぼう―先人の言葉に学ぶ―」をテーマにした今年の合宿であつたが、今回も沢山の心に残る言葉に触れて有難かつた。國武忠彦先生の御講義の中で「シラス」の言葉についての本居宣長の注釈(『古事記伝』の言葉「これ君の御國治め有坐^{たもす}は、物を見が如く、聞が如く、知が如く、食^{をす}が如く、御身に受入れ有^{たも}つ意あればなり」)は有難く、目開かるの思ひであつた。歴代の天皇様は国民をまるごと御身にお引き受けになり、どんな人々も等しく、その心を受入れられて、あたかも自分自身の血肉となる如く咀嚼されてをられる。その表現が「食」といふ言葉に表されてゐる、との宣長の慧眼に驚かされたのである。先生は冒頭「『古事記』を讀まずして天皇はわからない」と喝破されたが、まさにその通りだと思つた。

最終日、廣木寧運堂委員長挨拶を聴きて

日本の歴史の姿君たちはこの集ひにて見しと宣ふ

外国の侮り受けむ時にしもいよよ学びを励まざらめや

我々の父祖の汚名をそそぐのは君らの務めと熱く語らる

涙がとまらなかつた

(高知市立旭中学校教諭 岡つぐみ 41歳)

庭本秀一郎先生の導入講義でのお言葉「日本人ならではの心の持ちようを先人の生き方に学ぶ」を聞き、私がこの合宿に求めているのはいつもこういうことだと思ひました。和歌創作を通して、感じたことをそのままに相手に伝えることの難しさをいつも感じます。そのギャップを埋めていく作業が和歌創作であり、それは学ぶこと全てに同じ作業を要するのだということに改めて気付きました。合宿では本だけでは得ることのできない学びを体験できました。どの講義にも共通していえるのは本当に伝えたいという真心が伝わってくるものばかりだということです。小田村四郎先生が登壇された時は会場がとても神聖なものに感じました。お話されている姿を拝見して涙がとまりませんでした。理由はわかりません。また、日本の事、皇室の事、歴史についてより深く学んでいこうと考えるきっかけを頂くことができました。今年も参加させて頂いたことを心から感謝しています。

小田村四郎先生のご講義を聞き

思ひこめ語りたまへる師の君のことばを胸に留めおきたし

国体の真髓について覚醒させて頂いた

(元地方公務員 井原 稔 66歳)

今年も実に自身の濃い充実した合宿教室であった。伊藤哲夫先生の御講義では特に次の点が印象に残った。中国の主張は根本から嘘で固めた論法であるが、さうであっても国際社会ではさうした主張が繰り返されると国際的に定着してしまふ。かうした状況を防ぐためには、日本として正々堂々と毅然とした態度で自らの正当性を継続的に国際社会に対して情報発信していかなければならないと述べられた点。このことは韓国のいはゆる「歴史問題（認識）」についても同様のことが言へるがこの場合「謙譲の美德」は「謙譲の悪徳」になることを肝に銘じなければならないと思った。

また、國武忠彦先生は「シラス」と「ウシハク」との違い、臣下は「奉仕（ツカヘマツル）」、天皇は「聞看（キコシメス）」であることを御教授されたが、国体（国柄）の真髓といふか精華について覚醒させて頂いた。

宿舎より外を眺めて

けふもまた雨降りをするは大山の阿夫利の神の御業なるらむ

諸先生の御講義をお聞きして

御教へを胸に刻みて明日からも心新たにとめ行きなむ



カメラ・レポート 12

会員発表。北濱道合宿運営副委員長は、昭和十年代、当時の形骸化した学風を正すことに尽力され、戦死された方々の手紙や歌、日記等を取めた『いのちささげて一正・統一』（国文叢書19・20）を紹介され、「友達と心が通ひ合ふ世界を求めながらも、それをなかなか実感できない苦しみを打ち明けてをり、そこに心動かされた」と語った。

第十二班—女子社会人—

正岡子規と出会えて嬉しかった

(竹村 茜 20歳)

初めて参加いたしました。私は今回和歌の勉強をしたいと思いましたが、本当にいい経験させていただけだなと思いました。何より講義を通じて正岡子規に出会うことができたのをとても嬉しく思います。正岡子規と伊藤左千夫の短歌を通じてのぶつかり合い、そして交流に至るまでの流れ、また短歌をよみあう姿がありありと描けました。友を思う気持ちを歌に詠むという素晴らしさに改めて気付かされました。病のため死へと早いペースで向っていく子規の歌は、より一層みずみずしく、彩り豊かに広がっていました。正岡子規という人がいなければ、伊藤左千夫もこんなにあたたかい交流を得、それを歌に詠むことはできなかったかも知れませんし、もちろん、私が子規に触れることもなかったのだなと思うと、本当に嬉しくありがたい気持ちになりました。早速正岡子規について、子規の和歌について沢山学んでゆきたいと思っています。

正岡子規にふれて

出会へたる先人築きし道学^{みちがく}び縁^{ゆかり}を胸に歩みゆきたし

合宿の直き思ひを歌によむ大学生らに心打たれし

古典が楽しく思えた

(日本青年協議会 梶島明実 24歳)

今回は二度目の参加でした。感想自由発表でも言いました。が、山口秀範先生の古典講義が大変心に残りました。どちらかと言えば古典は苦手分野なのですが、山口先生が生き生きと話をされるお姿を見て、その世界に入り込んだ様な思いがして純粹に古典が楽しいと思えました。

私が心に残ったのは中江藤樹の「大學に励まされて」の所です。「大學」の「天子より以て庶人に至るまで、壹是に皆身を修むるを以て本と為す」の一文に中江藤樹が出会い、「聖人豈に学んで至るべからざらんや」と志を打ち立てられた姿は私の胸を打ちました。何百年も昔の、国も違う人の文章に触れ、人生の志を打ちたてられる、その切実に人生の道を求めておられる姿に大変感動しました。

又、山口先生が最後に「人生と学問はつながっている。自分の人生を左右する言葉に出会いなさい」と仰られたお言葉も心に残りました。私も中江藤樹のように先人の言葉で人生が左右されるような学問をして参りたいと思いました。

先人の言の葉しかと刻みゆき吾が生き方を定めゆきなむ

自国に自信を持つことが必要

(三朋インターナショナル(株) 加藤祐子 42歳)

五月の呉善花先生の講演会の時に、この合宿に誘っていただきました。仕事の都合もありましたが、参加できて本当に良かったです。学生の都合もありましたが、参加できて本当に良かったです。学生・社会人・退職された方々など年代は様々ですが、志を同じくする人たちが一緒に学び交流できる場は非常に貴重です。そして今の時代に合った先生方の講義を聴けるのも嬉しかったです。天皇陛下・ご皇室・教育・他国との関係・GHQのことなどについて思い切り話が出来て満足です。

今回特に思ったのは、やはり小さいときからの教育が大事ということ。英語をすらすら話すよりも自国に自信を持つことの方が余ほど対外的には必要です。それは小さい時からの教育が大きいと思います。

合宿について、あればいいなと思ったことは、①一時間でも体や姿勢、食事についての指導の時間（現代は体を壊す要素がありすぎなので）②これからの担う男子学生との班別研修の時間（彼らの率直な意見を聞いてみたかった）。

師や友の国想ふ心愛あふれ我の目開きさらに学ばむ

論語の楽しさを発見

（南キョーワ 渡邊由美子 46歳）

日本の歴史・文化を学びたいという思いがありました。が、どうやって学ぶかという時に、国民文化研究会のこの合宿を知りました。参加させて頂きまして、思っていた以上に面白

カメラ・レポート13



創作短歌全体批評。羽後信用金庫石脇支店・須田清文先生は、短歌の批評は、歌を直すのではなく、詠者の心に添ってより適切な言葉をさがすことだ、と述べられた。

くとても勉強になりました。どの講義もあつという間に時間が過ぎてもつとお話を伺いたいという気持ちになりました。

特に山口秀範先生の時間では論語がこんなに楽しかったのかという発見がありました。また、國武忠彦先生の時間では、古事記や歴史に学ばなければ天皇はわからないというお話から始まり、神話と現代が繋がる国は、世界中探しても日本しかないということ強く感じました。天皇陛下は日本国民の幸せを常に願ひ祈つて下さっている。そのお姿に日本国民が一体となって歴史を重ねてきたことを知りました。先人の方々が命がけでこの国を守つて下さり今に至っているということ深く受け止めました。

今日本は難しい時を迎えています。いつの時代も多くの困難を先人が乗り越えてきたことに誇りと自信を持って、日本を愛する方々と共に力を合わせて参りたいと思います。

日の本を愛する友と過す日々終はり近づきさみしさ募る

ことばの重要性を感じた

(MHD男塾&女塾 中村尚美 49歳)

今回の研修で一番感じたことは、「ことばの重要性」です。個人の考え・思い・情緒などすべてに直結するのが言葉であり、その言葉を特に大切にしてきたのが先人の方々であったことを知りました。江戸時代に日本を訪れた外国人が一樣に日本人の教養の高さ、人柄の素晴らしさに驚嘆しています、

それこそ言葉の土台がしっかりとあつて、言葉に込められた意味や思いを互いに理解できる素養があつたのだと思います。この研修で短歌に力を入れていることの意味がよくわかりました。

講義内容につきましては、「もつと聴きたい」と思うものばかりでしたが、これをきっかけに自分で勉強したいと思っています。今回学んだことをいかに塾生達の教育に生かしていくかを考えて実践したいと思います。

班員に若い方々がいらして、とても元気で愛おしく感じました。共に勉強させて頂いて嬉しかったです。遠方からも多くの方々が集われていて仲間を知ることができてよかったです。

七沢に集ひし我ら先人の思ひを受けつぎ紡ぎゆきたし

古典の勉強の大切さを痛感した

(書道塾講師 坂本和代 63歳)

今回もご縁をいただきありがとうございます。参加して、古典の勉強が大事だと痛感しました。

また、慰霊祭がどんなに大切なことかが、年々わかります。憲法改正が話題に上がる昨今、国を護つてくれた英霊を敬うことは私たちの底力になるような気がします。ありがとうございます。

厚木の夜清められたる祭壇に迎へし靈みたまに海行かば歌ふ

改憲について関心を持った

(日本語教師 スクイラチオテイのり子 50歳)

今回で三度目の参加となります。日程的に厳しいこともあって参加をためらいましたが、参加させていただいて良かったと思いました。

講義にもあったとおり、日頃保守的な考えを持つ者は少数派ですが、合宿では同様の考えを持つ人々と共に学ぶことができ、いつも嬉しく心強く思うことができます。このつながりがより確かなものとなり広がっていくことを願っております。

講義に関してはどれも素晴らしく感銘を受けましたが、特に、現在ようやく機運の高まりつつある改憲に関する内容に関心を持ちました。十七条の憲法と、明治憲法、現憲法の流れに関してより詳しく学びたいと思いました。

心が励まされた

(元神奈川県立小田原高校教諭 原川猛雄 65歳)

四日間の研修があつといふ間に過ぎたといふのが今の実感です。班員と真剣に学び、語り合へたこの四日間は本当に充実したものでした。

日本を取り巻く国際情勢、とりわけ米・中・韓との関係はこれからさらに困難な事態を招くことになるかと心配されます。



創作短歌全体批評。講師の巧まざるユーモアに、思はず笑みがこぼれる。

そういう中で日本人自身が歴史や先人の言葉に学んで、自身のよって立つ基盤をしっかりと固め、自信を持つことが大切です。その意味でこの合宿で多くの教へを受けることができました。

また、班員の国を思ふ熱い心に接することができたことは、私自身心が励まされる思ひでした。暗闇の中に一筋の光明が射し込んでくる思ひが嬉しく感じました。

真剣に友らと語りし四日間今閉会式を迎へむとする
国憂ふる思ひの深き友どちと共に過せしこの四日間
暗雲の立ち込めをりし今なれど一筋の光さしくくる心地す

日本の国柄の素晴らしさを学んだ

(元小田原市立矢作小学校校長 岩越豊雄 69歳)

「日本を取り戻す」事を目指す政権が発足し、いま憲法改正の問題が大きな課題となっている。おりしも、今回の合宿の底に流れているものは、憲法の根幹としてあるべき日本の国柄の素晴らしさであると改めて学ばせていただいた。それは、古事記にある「しらす」という言葉である。しらすとは、「知る」を語源とし、鏡を磨き上げて、にこりのない心で常に神々の心や民の心、すなわち国民の喜びや悲しみ、願いを心に写し、同一化する意味であること。また、古典を学んだ井上毅によって、この国柄の根本精神が明治憲法や教育勅語の基本軸とされたと学ばせていただいた。

このことを國武忠彦先生が古事記の原文から、具体的に分りやすくお話し下さった。まるで、打ち合わせたかのような関連に今日の大きな課題を開示していただいたように思った。伊藤哲夫先生のご講義を聞き

日の本の深き歴史を学べとふ師のみことはの心にひびく
中韓の歴史とくらべ日の本の国の尊さあらためて知る
國武忠彦先生のご講義を聞き

古事記のことはたどり日の本の国柄を説く先輩さはやかに

第二十一班—男子社会人—

先人達の意志を感じることができた

(平塚八幡宮つるみね幼稚園 遠山和也 26歳)

今回、初めて合宿教室に参加させていただき、先人の言葉に学ぶということは一体どんなことだろうかと思いました。

各講義を聞く中で、今まで学んできた歴史というものは自分の生活の中に反映されていない過去の事象でしかなかったとわかりました。そして、先人の残した言葉に触れることでその時の思いや大切にしたいことが伝わってきました。

現在の日本国の成り立ちも本来はそこに生きた先人がいたからこそ今に至った、その先人達の意志を感じることができたのが貴重な体験となりました。

班別研修では思いを語り合う中で真剣に班友と向き合いな

がら自分とも向き合えたような気がしました。くもりなき鏡で人と関わる、そこに人生の大切さを感じました。

明日からまた普段の日常に戻りますが三泊四日の学びを「知行合一」（頭で理解して心に刻む）で日々を大切に過ごしていきたいと思います。

合宿教室を終へて

班友との別れ寂しもまた会へる時の今より心待たるる

私の心の底にある「何か」を刺激された

（労働中村学園 白濱裕介 27歳）

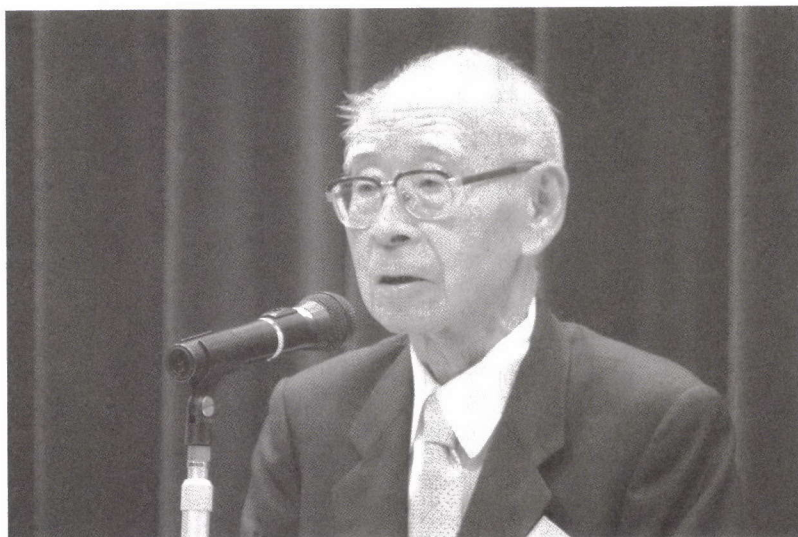
この四日間の合宿教室に参加させていただき誠にありがとうございました。うございました。

合宿教室を通し、初めて先人の方々の言葉に触れることができ大変感動しております。日頃の生活ではなかなかこのような機会はありませぬ。

「歴史に学ぶ」ということは非常に重要なことであると思います。特に印象に残ったのは明治維新に携わった方々の勇敢な姿です。あれ程の動乱の時代に生き、新たな日本を作り上げていかれたことを思うと、私の心の底にある「何か」を刺激されたような気がしております。

また明日から日々の生活、仕事がスタートいたしますが先人達に共通する「進取の精神」を心に留めて精進していきたいと思います。

カメラ・レポート15



講話。「憲法改正について」と題し、国民文化研究会名誉会長・小田村四郎先生は、現行の日本国憲法は占領軍が起草して押し付けたものであり、帝国憲法は大変柔軟性があり、美濃部達吉博士も佐々木惣一博士も改正する必要なしとの意見であった、といふ事実を示された。そして、これらのことを国民が知ることが憲法改正の上では是非とも必要なことであると語られた。

ゆるぎなき恩師の教へ仰ぎつつ励みてふたたびこの地に帰らむ

まごころを尽くして生きたいと強く願ひました

(衛藤晟一事務所 末永 直 30歳)

この三泊四日の合宿教室は、友と語らひ先生方のお話をお聴きでき勉強になり大変実りあるものとなりました。

とりわけ心に残りましたのは吉田松陰先生の次の言葉です。「道を明らかにして功を計らず、義を正して利を計らずとこそ云へ、君に事へて遇はざる時は、諫死するも可なり、幽囚するも可なり、飢餓するも可なり」(『講孟劄記』孟子序説)知行合一、これを実際に行動して歴史に足跡を遺されたことに驚くとともに私も利害を計算して生きるのではなく義を正して信念に従ひ、まごころを尽くして生きたいと強く願ひました。また慰霊祭での澤部壽孫副理事長の誓詞の中の「まごころの行き交ふ道」といふ言葉にも心打たれました。義を正しまごころ行き交ふ道往きて祖国の憲法を正しゆきなむ

それぞれ思つた感想を話しおたがいに理解しあへる環境

(栴まるぶん 猪狩武男 38歳)

初めてこの合宿教室に参加させていただき、自分の知らない事がたくさんあり大変勉強になりました。

一つの机を皆で囲み、皆それぞれ思つた感想を話し、おたがいに理解しあえる環境がすばらしい事がわかりました。

まだまったく整理出来ていませんがこの合宿教室で学んだことを今後の自分の仕事に生かしてつなげていきたいです。

先生方大変ありがとうございました。

同じ宿に泊まりて皆と一つの机囲みて学ぶ先生の言葉を

想ひを本当に自分の心に浸み渡らせていきたい

(凸版印刷(株) 川村雄規 30歳)

初めて合宿教室に参加致しました。

私を感じましたのは誰がこの歴史、言葉を継いでいくのであらうかといふ事です。歴史とは日本国の歴史、多くの人々の人生の層によりできてゐる歴史であり五十八回つないできた合宿教室の歴史でもあります。同じ班の先輩方が学生の頃の様子を語る表情より私は、会の歴史を透かして見てゐるやうな気持ちでありました。また言葉とは御紹介頂いた多くの本の言葉、海ゆかばの合唱、慰霊祭での山口秀範さんの和歌朗詠、五七五七七を反芻する事など普段では接することの少ない言葉です。

私は、消化しきれない程の知識、想ひを伝えて頂きました。

では二十年後、私達は次の世代に伝えていけるのだらうかといふ想ひで一杯であります。

知識だけでなく想ひを本当に自分の心に浸み渡らせていき

たい。その為には自分の心を透明にしなければならぬ。その上で知識もたくさんつけなければならぬ。自分が伝へるのだと常に意識して毎日を過ごさねばとあらためて心を引き締められました。

脈々と受け継ぎきたりし日本の歴史言の業誰ぞ守らむ

「太子の会」でしっかり勉強したい！

(元福岡県立筑紫丘高校 総括教頭 小林 至 63歳)

今回の合宿教室で痛感させられた事はしっかり勉強しなければならぬという事です。日頃は、自分の感情のままに生活している。時には社会に憤り、どうしなければならぬか、自問する。これから先どう生きようか、模索する。生きがい、生の充実感、国民文化研究会が合宿教室を続けてきた意義が、かすかに見えてきた感じがした。歴史に学ぶとは、先人の言葉に学ぶことである。

藤新成信君の「太子の会」でしっかり勉強したい！

閉会式での廣木寧合宿運営委員長挨拶

壇上にて発する言葉に目頭は熱くなりゆき胸ふるへけり

国文研ならではの合宿の組み立てが

出来ないものか

(日章工業株) 藤新成信 53歳

廣木寧運営委員長並びに各運営委員の皆様にご心より感謝申

カメラ・レポート16



慰霊祭に先立ち、元山口県立高校教諭・寶邊矢太郎先生が慰霊祭の趣旨と手順を説明された。そして、国のために尊い命をささげられたすべての人々が「後の世に託し遺されたお気持ちをお返し、私たちもまた受け継いで行かうと思ひをこめてお祭りをしたい」と語られた。

し上げます。各大学での輪読会活動が更に活発となりリーダー学生が育ち行きます事を念じ微力ながら私も努力致したく思ひます。また、班長の不足を解決するためには正会員の日頃の輪読が不可欠であらうと思ひます。まづは会員同士の活動の再開を期したく思ひます。

今回の最終日の中島繁樹さんのご講義は大変分かり易く要点を示され国文研とは何かをお話し下さったものと存じます。短歌創作と聖徳太子の讃仰研究を柱として国文研ならではの合宿の組み立てが出来ないものかと今後期待いたします。

平野耕治兄と合宿で再会して

若き日に交はし合ひたるまゝころは三十年経れど変はらざりけり

これからも古典に触れる機会をもつていきたい

(若築建設(株) 池松伸典 57歳)

二十一班社会人男子班に入らせてもらつた。合宿勧誘も何らしなまま参加させて頂き、合宿運営委員の御苦勞の一端をわづかにかいま見させて頂いた。自己研鑽を含め日頃からの活動を初心に帰つてやり直さなければならぬと思つた。

御講義はいづれも素晴らしい内容であつた。古典の言葉に触れそれを分かり易く甦らせられる先生方のお話に、またこれからも古典に触れる機会をもつていきたいと思つた。

國武忠彦先生の御講義を聞きて

素晴らしき言葉なりきと師の君は古事記ふることぎを読みゆかれけり

私もまた師の喜びを感ずべく古いにしへ文ぶみを読みてゆきたし

すべて皆様のおかげであつた

(羽後信用金庫 須田清文 58歳)

短歌全体批評は初めてのことで要領を得ず準備も不足であつたが小柳左門先生のご助力を賜りなんとか終へる事が出来た。班長の任務は池松伸典君の助力を得て、班行動をとるに出来ない時間があつたが、最終日程までたどり着くことが出来た。

明治天皇御製

たのしみ (明治四十年)

かへりごと待つぞたのしきつみためしことのは草を人にみせつ

この御製を合宿教室で縁を得た人達との交流のためのしほりとして行きたい。

たましひのこもるみ文に飛び込みてあぢはひゆくをば樂しみとせむ学びかつならふ樂しみ古ゆこの上なしとふお話よろしき縁得てつながる友らと語らへばおのづと力の湧きくるを覚ゆ

伊藤哲夫先生のご講義に圧倒された

(日本ユニシス(株)大町憲朗 58歳)

伊藤哲夫先生の御講義の熱意と熱弁とが、特に印象に残った。他の講義を含め、いかに日本の再生が必要か痛切に思った。

ご講話での小田村四郎先生のご登壇は大変貴重なものであった。私も切望してゐる憲法改正の問題にふれられ、我が意を得たりの感である。

この合宿で得られた力を、札幌に戻っても、同志の繋がりを再度、復活させ、北の火を灯したいと思ふ。

み友らの力によりてなりませるこの合宿の尊かりけり
おちこちゆ集ひし友の力にて大和の命を繋ぎゆきなむ
合宿の感動保ちて札幌の同士へ伝へ灯ともさむ

伊藤哲夫先生に学ぶ

(元日産自動車(株) 古川 修 69歳)

三十代の頃に銀座の事務所と一緒に勉強した大町憲朗さんの班長の下で、短い期間でしたが、「志」を持った方々と共に語り合ふことは、有り難いことでした。



カメラ・レポート17

夜のしじまの中、慰霊祭は厳粛に執り行はれた。山口秀範常務理事による祓詞に代へての和歌朗詠の後、元小学校長・岩越豊雄先生による御製拝誦、澤部壽孫副理事長による祭文奏上と続き、合宿参加者一同で「海ゆかば」を奉唱した。

伊藤哲夫先生の「五箇条の御誓文」、及び「教育に関する勅語」に関するご講義には、近代国家建設の大事業に命をかけた先人の思ひが、ひしひしと伝ってきて心打られました。

伊藤哲夫先生のご講義を聞きて

日の本のありやう語る師の君の貴き言の葉せまりくるかな
若き日ゆひとすじの道求めきし学びの道を聞くぞうれしき

憲法作りに日本の国柄を反映しなくては

(自然企画 伊藤重義 68歳)

参加目的であった見識を広める事が出来た。特に、新しい憲法作りに日本の国柄を反映させなくては、素晴らしい国作り、人作り、その気概を持ってゐた先人の遺志を継ぐことができない。登壇された講師、参加者のお話には聞きがいがあり、話しがいがあり、疲れも忘れ充実の四日間でした。

意見・思考の違いによる討論になったり、主義・主張の論議に心が磨かれて行く自分を発見した。これからの発言、行動に活かして行きたい思ひが強くなりました。ありがとうございました。

七沢に新たな出会い訪ねきて国想ふ師に見識広がる

参加者のレベルが高い事を実感した

(溝口敏盛 66歳)

戸田一郎さんの理科に関するお話を少々ですが拝聴し大変ためになりました。

参加者のレベルが高い事を実感しました。機会があれば、又、参加したいと思います。

日々の暮らしはすべてにおいて潤へど虚な思ひのいでくる我はも

現在の根本問題に信念をもって立ち位置をきめたい

(元大日本インキ株 中塚 毅 66歳)

現在の日本の混沌とした政治状況、自民党政権になって後の憲法改正問題についての議論や主張等が新聞・雑誌を賑わしています。小生としてこのような国の基盤に関わる重要な事柄について、しっかりとした信念を持って立ち位置を明確にしておくことが大切と感じていました。

今回の合宿で、日本国の成り立ちから現在に至るまでの根幹に流れる歴史観を学びたいとの思いで参加しました。四日間には亘る講義の中で、先人達の残した言葉や、先生方の補足される話の中で、あまりにも自分の勉強の足りなかつた事を痛切に感じました。今回の講義を受け、今後、さらに自分の努力を続けて学ぶべき必要があり、できる限りそれに向けて努力してゆきたいと思えます。初めての参加で講義の内

容を消化しきっていない状態もあり、帰ってからの反芻も必要と感じています。

合宿を終へて

み友らと語り合ひたるこの時を常に思ひつ学びたくあり

日本の再生に最も重要なものは國語である

(古賀 智 60歳)

「日本の再生」に最も重要なものは國語であると常々考へてをります。言語は時と共に變りゆくものとは云へ、わざ／＼破壊する事はありません。當用漢字・現代假名遣ひの採用は、意圖的な國語の破壊であります。先づは此れを正して「正漢字への復歸」と「正假名遣ひへの復歸」とを實現せねばならぬと思ひます。

マジですかヤバイですよの連發の會話に見ゆる心の貧しさ

同志を増やすべく微力を尽くしたい

(有ラド 戸田一郎 71歳)

合宿参加三回目。いつも思ふことながら講師達の講義の素晴らしさ。それは深い知識と、祖国への深い愛情そして何よりも、「後輩に伝えたい!」といふ燃えたぎる熱情がひしひしと感じられる。今回の参加者の中に「初めて参加します」といふ学生が多く見受けられた。珠玉の講義がこれ等の若者



合宿四日目。「思想の国柄—國民文化研究会の道統をたどる—」と題し、中島法律事務所弁護士・中島繁樹先生は、國民文化研究会の前理事長であった小田村寅二郎先生が若い頃に体験された学問の内容（聖徳太子と明治天皇のご思想）をたどりつつ、日本の思想の特徴がどこにあるかについて語られた。

の心に響き、常に日本の歴史に照らして自己の行動を考へ、「自分は日本人！」と、堂々と言へる人になって欲しい。

私にとつて国家、国旗、君が代・・・などについて日頃、真剣に語る相手が周辺には少ない。しかし、この合宿教室では誰もがこれについて心おきなく討論することができる。

しかし、自分が心を許せるグループ内で語るだけでなく、同志を増やすべく、今後は、さらに微力を尽くしたいと考へてゐる。

大山の阿夫利の神のはからひか降りし雨止み社殿に詣でる

身の引き締まる想ひです

(福島義栄 65歳)

毎回合宿教室に参加し、先生方の熱い心に接しいつも身の引き締まる想ひです。身を修める＝修身のご講義もあり、時宜に適したものでした。

又、慰霊祭に参加させて戴きました。神々様、先人の方々、ご祖先様を敬虔な気持ちでお出迎へ出来、いい体験でした。友がきと朝のつどひに「ふるさと」を歌ふはうれし力身に満つ

第二十三班―男子社会人―

真に国を憂へる同志と交流できた

(川久保 勲 72歳)

初めての参加であったが、このような合宿に、多くの学生が参加していることには嬉しい驚きを感じた。

講義の開始、終了時の挨拶、また班別研修の開始、終了時に姿勢を直すことは、日本の大切なしつけを実践しているようで感心した。また、班別研修では、真に国を憂へる同志が集まっていたので充実した時間が過ごせた。

国を愛することを更に深めていきたい

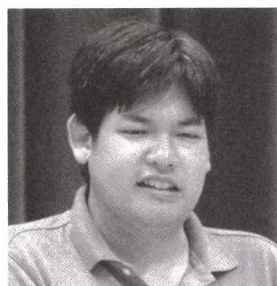
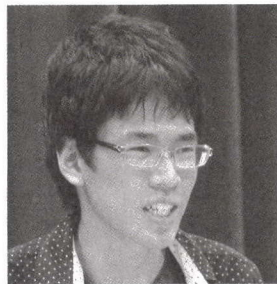
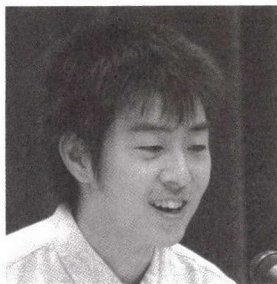
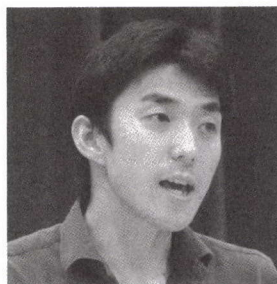
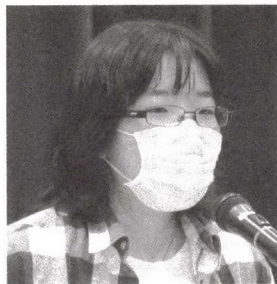
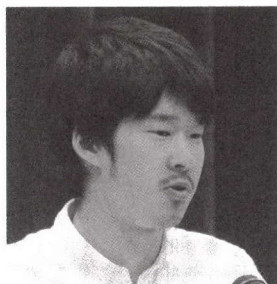
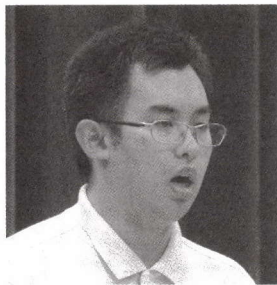
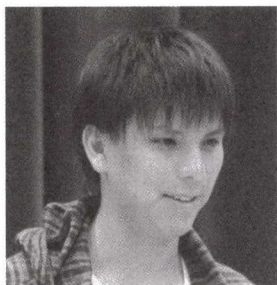
(株)NTT東日本 平野耕治 52歳)

二十数年ぶりに参加させていただきました。国を愛することを更に深めていき、更にまわりにもこの感動を伝えていきたいと思つています。

今回の合宿参加にあたり、職場の同僚に声をかけてみましたが、自分の言葉がうまく伝わらず参加に至りませんでした。しかし、今回の合宿で得た感動を改めて伝えて、次回は同僚を一人でも参加させてみたいと思います。

二十数年ぶりとは言え、変らない国民文化研究会の営みに驚くとともに、自分のすすむ道に間違いはないと改めて確信を得ることができました。ありがとうございました。

先人の残されし文読み込みて心にとどめむ美し言の葉



全体感想自由発表。参加者は「国を思ふ同世代の人と話ができて嬉しかった」「日本人の思ひをたどらうとした班別討論が勉強になった」「武士道に興味を持った。日常生活で礼儀・名誉・忠義を尽す場面は多く存在してゐると感じた。かういふ気持ちを持つことが日本の再生につながる」「人生と学問は繋がってゐる。人生を左右する言葉に出会ひなさいといふ言葉が心に残ってゐる」等、率直に胸の裡を語った。

国民文化への理解が深まった

（日本大学教授 夜久竹夫 65歳）

最近まで仕事に専念する生活を続けてきましたが、還暦を過ぎて国民文化の勉強をする機会を得て、今年は昨年に続いて二回目の参加となりました。

日頃携わっている学界では、国際競争が大きな比重を占めていて学者たちの研究の動機にも国の地位向上を目指す素朴な愛国心が大きな比重を占めています。

しかしながら、私自身も周囲の人たちも、素朴な愛国心を説明する知識が足りないため、論争や請願の言葉が出てこない事がしばしばあります。

今回の合宿で、新渡戸稲造と西郷隆盛の著述の解説を改めて聞いて、国民文化への理解が深まりました。

講師の先生方と実行委員の方々に感謝いたします。

合宿感想発表会にて

朝もやにけぶる山並ながめつつ思ひを聞きて気持ちやすらぐ

緊張のほぐれた短歌相互批評

（亜細亜大学講師 永井鉄郎 50歳）

「先人の言葉に学ぶ」という御趣旨の下での御講義は時に難解で、同じ班の方々も博識の方が多く、大変緊張しておりました。しかしながら、緊張が解けたのが短歌相互批評の時

でした。短歌の中で自分なりに悩み抜き適切な語句が思いつかなかつた箇所は、ほかの方から見ても同じで、言葉遣いの不適切さを指摘され、誰しも同じことを考えるのだと痛感いたしました。

また、国を愛する者同士、胸襟を開いて語り合うことができた時間は誠に貴重でした。日頃は歴史や憲法観を前提として相手に理解してもらうことに時間を浪費されてしまいますが、この場ではその必要はなく、容易に理解し合えることに感激しました。この貴い経験・知識を基に、今後自らを高めてゆきたいと思えます。

老若の別なく語りし愛国の情をばとはに忘れじと思ふ

頭をひねった短歌創作

（維新政党・新風 佐藤昭夫 46歳）

この度初めて合宿教室に参加させていただきました。このような合宿が五十八回も続いているのを見て、まだまだ日本は大丈夫だと思いました。

講義については、私もそれなりに活動し、勉強もしておりましたので理解も早かったです。短歌創作は経験もほとんどなかったため色々頭をひねりました。

都合が合えば是非次回も参加したく思いました。ありがとうございました。

参加者一人一人のまごころを感じた

(神奈川県立小田原高校(定時制) 教諭 中村正和 57歳)

今回は改めて自分を見つめるために合宿に参加させていただきました。国文研の方々、そしてこの合宿教室の最も大きな魅力は、お一人お一人、一つ一つの事にまごころがあり、誤魔化さずに自分と向き合い、友と向き合い語り合うことができるというところにあります。今回の合宿でも、そのまごころに触れ、かたじけなくも誠にありがとうございました。国文研の皆様および班員の皆様心より御禮申し上げます。

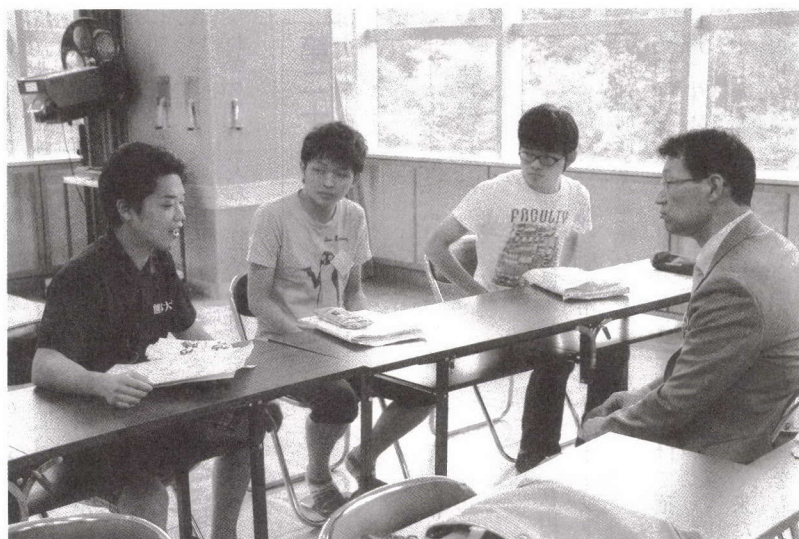
特に、國武忠彦先生の「古事記」の御講義はとても勉強になり、様々な発見と気づきがありました。また班の方々との討議の中で、人と向き合い心を開きあうことの大切さを学ぶことができましたが、今回の合宿教室のとても大きな財産となりました。本当にありがとうございました。重ねて御禮を申し上げます。

七沢に友と向き合い語りひて明日のみ国の再建を祈る

古典に残る日本の思想について学ぶを得た

(株)寺子屋モデル 横畑雄基 37歳

「人生是非の道理は缺陷ある個人我を中心としてのみ定めらるべきではない」が、現在のわが国の法体系にこの思想が全く欠けてゐる」。最終日に中島繁樹先生が語られたこの言



地区別懇談でなごやかに語り合ふ参加者。

葉が印象に残りました。

「是に皆身を修むるを以て本と成す」といふ、『大學』の言葉に触れてみれば、個人尊重に偏重する現代社会の秩序のをかしさに気づくはずです。気づいてゐても他人事としてすておいたのが、戦後日本の姿だったのでせう。

この合宿を通して、国柄について、また古典に生きる日本の思想について学びを得たことを、自分なりに実践しながら、一人でも多くの人に伝えていけるやう努力したいと思ひます。

先日、十数年ぶりに手紙が届き、貸してゐた本を

届けてくれし武澤陽介君と再会す

君の名を名簿の中にみとむれば再会かなふと楽しみぞわく

「長い間失礼しました」と近寄りし君の姿に笑顔こぼれる

「数年間忘るる事なくあの本を探す日々をぞ過ごしつ」といふ
「誤りて父が書齋に紛れ込みそのまま日数を経たり」とぞいふ
年月を経たりといへど二冊の本を忘れぬ心美し

自身の研鑽に励みたい

(中島法律事務所 中島繁樹 65歳)

合宿運営に当たられた廣木寧委員長ほか、運営委員の方々
に感謝いたします。

開会の挨拶をされた今林賢郁副理事長、閉会の挨拶をされた磯貝保博副理事長、それぞれのご挨拶は、参加者の気持ちをよく考慮した適切な内容でした。参加者が目標に達しない、

少ない数であったことは残念でしたが、数は少なくともこれだけの内容で、これだけ充実できるのであれば、合宿教室は第五十九回目も、第六十回目も実現は大丈夫なのではないかと感じました。今後も、次の合宿教室の開催が確保されますやうに、私自身が研鑽に励みたいと思ひます。

講義を受け持ちて

いまここに友らの前に国がらをいざ語らむと演壇に立つ

わが友ら若き人らが皆我の話聞きをりこの会場に

第二十五班―男子社会人―

十七条憲法より受け継がれてきた国柄の内容を
勉強したい

(千葉県木更津県税事務所 秋山信之 48歳)

班の先輩方に中島繁樹先生の御講義のポイントを示して頂き、班別研修も有意義なものでした。

柴田悌輔先輩や大日方学君にお声をかけて頂き感謝してゐます。頂いたレジュメもこれからよく読みたいです。

十七条憲法から明治憲法まで受け継がれて来た国柄の内容が現在の憲法には欠けてゐることを、内容をもつとよく勉強し、実感として理解していきたいと思ひます。

久しぶりに会ひたる友ら笑顔にて迎へてくれしは有難きかな

「道徳性に反する」といふ言葉を考へていきたい

(神奈川県立市ヶ尾高校教頭 大日方 学 48歳)

この一年、厚木での合宿教室開催のために大変な準備・勧誘をされてこられました廣木寧運営委員長を始め、運営委員・事務局の皆様へ感謝申し上げます。

最後の日の全体感想自由発表での感想を聞いてみると、講師の方の言葉や吉田松陰の短歌など、先人の言葉がしかと参加者の胸に刻まれてゐることに感じられ、内容の充実した合宿だったことが偲ばれてきました。

私自身四日目の中島繁樹先生の御講義の中で、日本国憲法第九条の第二項は「道徳性に反するものである。」との御言葉が胸に残つてをります。先生はこの言葉を精神科学研究所の田所廣泰先生、小田村寅二郎先生が展開された思想戦を踏まへてお話しされましたが、その点をもつとお聞きできればと思ひました。憲法を、戦争を考へていく、これからの抛り所になるのではないかと思ひます。

閉会式における廣木寧運営委員長の挨拶を聞き
先人の汚名を晴らす営みが合宿なりと先輩はのたまふ

日本の歴史に思ひを寄せることができた

(福岡県立鞍手高校教諭 日比生 哲也 49歳)

先人の言葉を辿りつつ日本の歴史に思ひを寄せることがで

カメラ・レポート 21



閉会式。国歌斉唱の後、主催者を代表して磯貝保博副理事長(右)は「合宿教室で学んだことを深め、日本人としての自覚を高めて行つて欲しい」と述べた。次に学生代表挨拶として、立命館大学二年・藤新朋大君(左)が「歴史を通して歴史上の人物と繋がり、歴史を共有する仲間と繋がり得ることを学んだ。これからも共に歴史を学んで行きませう」と語つた。

きたことを有難く思ひます。

中島繁樹先生の引用された十七条憲法や「大日本帝国憲法発布の上諭」に通底するもの、日本に脈々と受け継がれてきた心の在りやうをさらに味はっていきたいと感じました。

合宿地に向かう

七沢の森の小径を蟬の音に囲まれ歩く汗拭ひつつ

学ぶことの楽しさを改めて知ることができた

(出光興産(株) 広島秀明 55歳)

新たにお会ひできた方もあり、意義深い研修となった。國武忠彦先生のご講義「神武天皇」を拝聴して、先生が『古事記』がいかにか読んで楽しい物語であり、そこに語られてゐる精神性は現在まで連綿として続いてゐることを語られ、もう一度『古事記』をじっくり読んでみたいと思った。また、竹田恒泰氏の現代語訳が出版されてゐることを今回教へてもらったので、合せて読んでみたい。学ぶことの楽しさを改めて知ることが出来た合宿教室でした。

わが国は知らず固なり古代より皇祖の御心照らすごとくに

古事記を読む楽しさが体感された

(日産自動車(株) 奈良崎修二 57歳)

五年ぶりの参加で、素晴らしい時間を過ごさせて頂きまし

た。國武忠彦先生の古事記のご講義は、その内容もさる事ながら、先生の古事記の物語や言葉に触れる喜び、嬉しさを、楽しさが本当に体感される様なご講義で、学生諸君も、「もっと聞きたい」と感じたのではないかと思はれるものでした。また、慰霊祭の準備のお手伝ひをさせて頂きましたが、雨に崇られる事もなく、お祭りそのものも大変厳かに斎行されて良かったと思ひます。

國武忠彦先生の古事記のご講義を聞き

古への文に伝はる物語若きらを前に語りゆかれぬ

皇国の初めに神の物語ありと目を輝かせ語り給ひぬ

ありがたし嬉しと言ひて若きらに古へのふみ誦み聞かせ給ふ

美しきふみの調べと豊かなる言葉のひびき伝へむとされぬ

原文を読みたいと思った

(株)講談社 藤井 貢 62歳)

山口秀範氏の講義は、中江藤樹、熊沢蕃山の人となりがよく表れてゐる文章を紹介され、つねに足りない点はないかと反省して生きることを勧められてゐるやうに受け止めました。國武忠彦先生の御講義は、記紀に見える天皇の本質ともいへるもので、鏡によって身を正されてゐること、民草をしろしめされてゐることが語られ、鏡が三種の神器のひとつとなつてゐる意味を説かれました。又ニギノミコトが天孫降臨の折に、「爾皇孫、就^いでまして治せ^{しらす}。行^い矣^い」とおっしゃられ

てゐたことは初めて知り、語調がよく、原文を読みたいと思ひました。

松本洋治先輩に車でお送りいただき

天草の島育ちにて海釣りが趣味となりしと語る先輩はも

小学の教師を長く勤めたまふ思ひ出をいつか聞かむと思ふ

カメラ・レポート22



閉会式。廣木寧合宿運営委員長（右）は、どうか日本人の正しい姿を後世に伝えてくれ、さう言ふ声が先生方の諸講義から、あるいはレジュメの中から聞えてきたのではないですか、と語りかけた。福岡大学二年・岡部智哉君（左）の閉会宣言で合宿教室の幕は閉ぢた。

合宿中に創作された「短歌詠草」

—しきしまのみち—



短歌創作について

この合宿教室では、例年、主催者を含めて参加者の全員が、短歌を作ることにしてをります。これは、この合宿教室の大きな研修課題の一つであり、今回も多く短歌が創作されました。

短歌は、現代においては、人々の日常生活には馴染みの薄いものとなり、文学的趣味の一つとしてしか受け容れられなくなつてしまつてをります。従つて、この合宿教室に初めて参加する学生青年諸君にとつて、短歌創作は大きな戸惑ひであり、かなりの負担でさへあるかに見受けられるのですが、合宿日程を追ふにつれ、自らの心の動きを言葉にすることのむづかしさ、まごころの籠つた言葉の奥深い味はひを多少なりとも体験して行く中で、次第に、その意味が把握されて行つた様に思はれます。

そもそも日本人は、千数百年の昔から、「万葉集」に見られるやうに、あらゆる身分・職業の人々が、学問知識の深淺、老若男女の相違を越えて、五七五七七の定型の中に、折々の自己の思ひを素直にうたひ上げてきました。自己の内心を赤裸々に短歌の上に表現することは、同時に厳しい内省を伴ふものです。いはば短歌創作の過程で、厳しい心の鍛錬が行はれるのです。そこで私達の祖先は、短歌を詠むことを人生の修行の一つの手段と考へて「しきしまの道」と呼んできました。日本人は、短歌を詠み交はすことによつて、人間にとつて最も大切な心の働き、情意を厳しく鍛へ合つてきたのです。先祖の歌を学ぶことは、私達一人一人の心の中に先祖の姿を蘇らせる作業であり、自分が紛れもなく先祖とつながりをもつた日本人であることの發見であり、また自覚なのではないでせうか。現代の教育では、知識の集積や論理の整合に重きが置かれ、人間にとつて最も根源的な心の問題がなほざりにされてをります。本合宿では、かうした現代教育の束縛を自ら感知し、そこから一歩でも抜け出さうとする営みが、この短歌創作とその後の参加者同士の相互批評によつて集中的になされてゆきます。心の奥底に眠つてゐるまごころを呼び覚まし、人のまごころに敏感に感じる、素朴にして溢れる人

間性を取り戻さうとする試みが、ささやかながらも実現されてゆくこの貴重な経験は、参加者全員にとって、忘れがたい印象として心の奥深く刻み込まれるに違ひありません。

合宿二日目の午後、国民文化研究会会員の久米秀俊氏（大阪湾広域臨海環境整備センター）により短歌導入講義がなされ、短歌を作る上での基本的ルールが指導されました。その後夕刻までに各人が創作した第一回目の短歌が提出されました。慌ただしい日程の中で生み出された短歌ではありませんが、作者の集中された内心の働きはしばしに表現されてをり、作歌上の巧拙を越えて、強く惹かれるものが籠ってをります。提出された短歌は、同時に国民文化研究会会員による選歌・印刷のための清書作業を通じて、翌日には歌稿となつて参加者全員に配布されました。この歌稿をもとに国民文化研究会会員の須田清文氏（羽後信用金庫）によつて、短歌全体批評がなされました。ユーモアを交へた御話の中にも一語一語に含まれる作者の心を全身をもつて偲はれ、直されてゆく姿に、参加者は短歌批評のあり方を自然に感得したのです。その後、各班ごとに班員全員による相互批評が行はれ、各自の短歌の表現をより正確に添削し合ふことを通じお互ひに友達の心に触れ合ふことが出来、合宿生活において、寝食を共にし、胸中を披瀝し合つて来た友情の結び付きが、一段と確認されました。

短歌創作を通して展開された、まことに稀な精神生活の体験は、参加者ひとりひとりに、言ひ知れぬ喜びをもたらすことになりました。

ここに収録された歌の数々は、班員の心を集結して推敲・添削されたものです。その表現形式においては稚拙なところも見受けられますが、これらの短歌の中から瑞々しい貴重な魂の輝きをお読みとり下されば、と心から祈念する次第です。

短歌詠草（しきしまのみち）合宿第一回目の創作作品（班別相互批評をして添削された作品です。第二回目の作品は感想文の末尾に収録）

第一班

國學院大學 院 二年 相澤 守
大津波に失せし息子思ひて和歌詠みし母の悲
しみ胸に迫りぬ

大阪大学 経 四年 谷村 遼
石段を素足で登る友ありて我も負けじと歩み
すすめる

九州産業大学 経 三年 緒方雄樹
雨降山登山にて
思ふより遥かに険しき山道に足重けれど下社
を目指す

福岡大学 経 二年 岡部智哉
ご講義のたびに友らと卓囲み偉人を語る集ひ
楽しき

熊本大学 法 一年 浅山弘明
石段を登れど登れどまた石段溜め息漏るるも
歩みは止めず

福岡大学 経 一年 木村太一
素足にて山路踏みゆく足裏に自然の力ひしと
伝はる

日本青年協議会 佐瀬竜哉

久米秀俊さんの短歌創作導入講義を
開きて

写生とは人を思ひて友恋ふるそがこころとぞ
師は示されぬ

大山登山

いづくまで積み重なりし石段をひた登りゆく
神宮目指して

いにしへの修験者もまたこの道を登りゆきし
か険しきこの道

若きらの後につづくも少しづつ離されゆくが
悔しかりけり

（栞）寺子屋モデル 山口秀範

男坂の険しき階段下りつつも心去らざり今宵
の講義の

集ひ来し若き友らの胸内に学ぶ喜び伝へてし
がな

（二回目の作品）

部屋で閉会式を待ちつつ

朝からの雨上がりぬと知られけり窓の外繁く
虫の音起こりて

熱帯夜を忘れて三泊取り組みて夏の集ひは今
果てむとす

「学生班長」思ひがけずも努めたり若き友ら
の気付きを念じて

日の本に生まれし誇りと喜びを確と得たりと
口々語りぬ

この縁おろそかにせで己がじし励み給へやみ
国の支へと

第二班

東京大学大学院 理 一年 高木 悠
阿夫利神社下社より徒歩にて男坂を
下りゆく折に

険しかる石段續きて足元を確かめ確かめ下り
てゆきぬ

眼の下の木々の間ゆ涼しげな水の流るる音の
聞えぬ

水の音を耳を澄して聞きをればしばし暑さを
忘るる心地す

熊本大学 教 四年 吉田 智
武士道に教へられたる義と礼とふ誇れる文化
守り抜きたし

立命館大学 文 二年 藤新朋大

大山阿夫利神社下社に歩き詣でて

大山の名水を汲み載けば我が心まで潤ひにけり

専修大学 法 四年 奈良崎恵祐

星空を期待して空を見上げし折に

星々は見えねど月に照らされて雲の浮ぶは美しかりけり

福岡大学 経 三年 小林拓海

祖国くに想ふ心を語る友達のありしを知りて我はうれしき

福岡大学 経 二年 立川謙志郎

はてしなく続く石段我が足で登ると思へばため息の出づ

亜細亜大学 法 一年 最知雄飛

体調の思はしくなく先行くを諦め決々下山するなり

福岡大学 商 一年 藤 武史

初めての合宿参加で思はずもおさなじみと会ふはなつかし

公益財団法人交通事故総合分析センター

小田村初男

この夏はいと暑き日のうちつづき大雨もありて常の年ならず

合宿に集ひし友らと大山の雨降りあま神社に参りて祈る

水源みなもとに雨降らせたまへ暑き日はやはらげたまへな過ぎたまひそ

下る道きつき男坂おさかに入りたるも皆に励まされ無事下りたり

第三班

大山登山

興銀リース(株) 小柳志乃夫

若さらに後れはすまじと山道を登りゆきけり息切らせつゝ

大汗をしたゝらせつつ石段を登れど社は未だ見えざる

登りこし阿夫利神社のみ社の後ろの森に雲立てる見ゆ

神奈川大学 法 四年 市川絢也

庭本秀一郎先生のご講義をききて大切な事は仕事と自信もち語れる人に我もなりたし

大阪大学 経 四年 青野 遼

忠義もて命捧げし士もののふの心知るべく学び行きたし

中央大学 文 四年 廣木摩理勢

命もいらす名もいらすと西郷の強き覚悟に心動きぬ

拓殖大学 政経 一年 大貫大樹

福岡大学 経 二年 池田抜輔

山降りて広き湯船にゆつたりと体伸ばして心地良きかな

追手門学院大学 社会 二年 絹田 暁

汗かきつじめじめとする山道を登れば社に涼風かぜのふく

福岡大学 経 一年 田中京介

み社に近づくとつれ涼しさに汗の冷きり風呂待ち遠し

日本青年協議会 外村聖典

サンダルで険しき岩の山道を登れば我に力みなざる

大山に登りて

実朝も祈りしと聞く竜王寺の御前にたどりつき一息入れぬ

実朝の和歌を仰ぎし亡き大人もおとづれしことありしかと思ふ(※茶谷武大人命)

第四班

北濱 道

伊藤哲夫先生の御講義にて先生の飲み屋での韓国人女性とのやりとりを伺ひて

これまで我が国人は本当に向き合ひ話す人

なく不満と

先生は彼女に対し誤魔化さず歴史事実を示し
ましきと

その人は初めてまともに相手され感謝の言葉
を述べたりといふ

歴史的事実をおさへ我も又話せるやうになり
たしと思ふ

専修大学 経営 二年 芦田和久
大山の男坂にて

石段の険しき坂を下りゆけばしだいに我が足
弱りゆきけり

大阪大学 経 四年 岩井中 健
境内のしじまの中に速くより雷の音かすかに

聞こゆ
不気味なる雷の音響くなり霧にかすめる雨降
の山に

福岡大学 経 四年 西脇悠平

大山登山の帰りのバスにて
帰り道共に登りし仲間らと話はづみて笑みが
こぼれる

九州工業大学 工 一年 梶栗正大

庭本秀一郎先生の講演を聞いて
武士道の心を持ちて先人の守りし日本に我は
生かさる

福岡大学 経 二年 田中貴大

霧の中初めて登る雨降山汗ふきいでて雨ほし
きかな

宮崎公立大学 人文 一年 田中亮佑
遠き地に出会ひし友と机囲み新しきこと学ぶ
は嬉し

一年に一度の会ひの友なれど会へばたちまち
心ほぐるる

語りゆけばなつかしきかなさまざまに過しし
昔よみがへりくる

国御岳杉の林に霧立ちて声うるはしく山鳥は
啼く

登り来し阿夫利の社神さびてみ山の杜は霧
にかすめり

第五班

大阪湾広域臨海環境整備センター 久米秀俊
大山に歩いて登りし折り

二千年余り古人ら登りこし古道を登りぬ若き
らとともに

進む友の汗の落ちたる石段を登りぬ我も汗落
としつつ

若さらに負けじと古道を登りゆくもいつしか

遅れ肩で息する

古へゆ歌に詠まれし阿夫利山を登り得しかも
予報違ひて

國學院大學 神道文化 研究生 上野竜太郎
「大山」散策

久々の大山登山に吾の身体耐へられるかと不
安のつもの

石段を一段一段登るごと膝を励まし耐へよと
祈る

石段にかじりつくごと下社まで登りて友の見
ゆるはうれしき

京都大学 工 一年 安永知生
これからの自分にとつての「合宿」

宣誓で今始まりし吾道は青き楓の如くなりけ
り

明星大学 情報 三年 岡松 優
大山散策にて

大山の山道歩き思ひ出す昔遊びし故郷の山を
京都大学 経 三年 山内 遼

タイに旅立たれる庭本秀一郎先輩を思ひて
異国へと旅立つ先輩も見つらんか無事を祈り
て見上ぐる空を

筑波大学 人文 二年 下村貴宏
石段を登りつつと見上ぐれば深緑の山に霧
のかかれり

福岡大学 経 二年 三谷晃希

大山散策にて

ひと休みすれば涼しき風吹きて蟬の声聞こえ
せせらぎみゆる

元富山県立富山工業高校教諭 岸本 弘

大山散策

若き日も老いもまじりて相模なる阿夫利み山
路今登りゆく

ひと坂を登ればまたもひと坂と果てしもなき
に石段いさばし続く

若き日も息の乱るるこの坂を汗ぬぐひつゝ、吾
もたどるなり

四年前互みに声を掛け合ひて登りし友ら思へ
ばなつかし

○

山行きも果てたるひと日夕暮れて小雨の中に
鐘ヶ嶽立つ

第十一班

(株)IHIEエアロスペース 内海勝彦

大山登山

大山の険しき道を班員の背中を見つゝ、息切ら
しゆく

登れども社は遠くいつしかに乙女らの姿見え

ずなりけり

下山かと思ひし時に思はずも乙女らの声真近
に聞ゆ

声聞けば力湧き出で立ち上がる共に社に詣で
むもの

苦勞して登りし後に班員と眺むる景色忘れが
たきに

東北大学 理 二年 工藤真秀子

生温き山風ふきて空見れば雲たれこめてまち
かに見ゆる

実朝を思ひて

ものふは連なる石段いさばし颯爽と登りゆきけん遥
けき昔に

社近く霧のかかれる山の中ものふ登りし
古いにしへ思ふ

御社前の売店で大山の清水をいただきて
しみとほる冷たき清水ふるまひし女をんなの優し
さ嬉しかりけり

中村学園大学 教 二年 古賀明香里

御社を目指して上を見上ぐれば立ちほだかる
はけはしき山道

中村学園大学 栄養 二年 矢羽田 葵

大山のこごしき岩が根踏みこゆる友の背見れ
ば力湧き出づ

九州工業大学 工 二年 高野真理

おみくじをひきたき思ひに社まで飛ぶがごと
くに走り出した

アメリカンスクールインジャパン高等学校二年
スクイラチオテイ 茉莉菜

来む夏も会はむと言ひし友達の姿は見えずさ
びしかりけり

高知市立旭中学校教諭 岡 つぐみ

野外研修大山散策にて
大山のゆく手に見ゆる階段の高さに出づる驚
きの声

元地方公務員 井原 稔

岩肌の大きき山道あへぎつつ目指すは阿夫利下
の御社みくら

先を行く若き友らに遅れじとわが身勵まし歩
を進め行く

音に聞く大山阿夫利の御社みくらに六十路を越えて
初に詣でぬ

第十二班

元神奈川県立小田原高校教諭 原川猛雄

阿夫利神社下社にて

神さまのおはすがごとく山肌は霧におほはれ
おごそかに見ゆ

谷間より吹きあぐる風ひんやりと汗ばむ肌に
心地良きかな
木の間より鳥のさへづり心地よくだたずみ
りてしばし聞き入る

書道塾講師 坂本和代

伊藤哲夫先生の講義を拜聴して
ゆるぎなき御國造りは天皇の御民を思ふ無私
の御心

大山登山にて

雨降山ゆわきて流るる清き水に鏡のごとく我
身うつれり

MHD男塾&女塾 中村尚美

班別研修にて

愛しや乙女等御國を思ひつつ語る言葉に心
打たるる

(有)キョーワ 渡邊由美子

みやしろに着きてうしろを振り向けば見渡す
景色に心打たるる
石段に登りてやしろにたどり着けば迎へてく
れし親子獅子像

三朋インターナショナル(株) 加藤祐子

新しき友と過ごせし一刻は学生時代に戻りし
心地す

日本青年協議会 柘島明実

野外研修にて

深き霧につつまれしみ山を眺むれば社の神の
おはしますごと
男坂をみなの身ながら下りければ両の脚ひざ
ふるへくるなり

短歌創作導入講義を受けて

悲しみを悲しみのままにありありと言の葉に
する詩人になりたし

竹村 茜

佐々木恵美さんの和歌にふれて

悲しみを悲しみだけで終はらせずむかひあは
れし御心しのびぬ
はかりしれぬ痛みかかへて詠まれたるうたに
目頭あつくなりぬる

正岡子規にふれて

自らの生涯賭してうたごころよみがへらせた
る思ひ学びて

先人の熱き信念受けつぎて極めゆきなむしき
しまの道

日本の道

日本語教師 スカイラチャオテイ のり子

厚木合宿に向かふ車中にて

打ちつくるフロントグラスの雨はじき集ひの
やどへひた走りゆく

元小田原市立矢作小学校校長 岩越豊雄

名にしおふ阿夫利神社のうら山の木々を潤し
霧立ちのぼる

龍王に雨やめたまへと祈りたる阿夫利の山は
霧にとざせり

第二十一班

羽後信用金庫 須田清文

七沢に集ひて会ひしはじめての友の言葉に耳
をすましぬ

心こめ書かれし文をみ友らと声をあはせて読
み進むかな

いかならむ思ひこめらるる文なるかと作者の
心しのびつつ読む

夜の研修終了後移動の折に

七沢の夜空さやかに雲去りて望月のかけてり
わたるかな

(株)まるぶん 猪狩武男

大山の険しき道を登り行けば汗噴き出しぬ夏
の盛り

下山するケープルカーの車窓より紅葉見つけ
秋を感じる

凸版印刷(株) 川村雄規

合宿所に向かつて木々に囲まれた一本道
を歩きながら

終はりゆく夏の寂しさ打ち消しぬ山を包みし
蟬の鳴き声

衛藤晟一事務所 末永 直

伊藤哲夫先生の講義を受けて後の

班別研修にて

班友と五箇条の御誓文ともに声に出し読み上げゆけば心清しき

大山阿夫利神社下社殿前にて

坂登り石段踏み越えやうやくに御社の前に巡り着きたり

下山し「鈴川」上に架かる「くもいばし」を通りし折に

幾すぢも水滝のごと落ちて溜まり川の流れとなりてせせらぐ

何人も学問の道を邪魔し得ぬ三泊四日の合宿教室

学校法人中村学園 白濱裕介

先人の声は心に響きさて夜空を見上げ吾が師を想ふ

平塚八幡宮つるみね幼稚園 遠山和也

大山阿夫利神社登山にて

せせらぎの音を聴きつつ山道を友と登れば心癒さる

元福岡県立筑紫丘高校 総括教頭 小林 至

大山阿夫利神社登山

若き友と御社目指し階段を汗を流しつ登るは

楽し

若き友の登るペースも速き事に我も負けじと

ついて登りぬ

御社に近づきたれば相共にペースも落ちて息のあがり

我が身の苦しさ負けぬと声を出し共に励まし

登りゆくなり

第二十二班

日本ユニシス(株) 大町憲朗

大山阿夫利神社を目指して

み友らと語り合ひつつ登りゆけば疲れも忘れ

うれしさ湧きくる

ケーブル駅めざし登れど階段のはてなく続き

言葉少なし

汗かきて登り来たれば我が疲れもふきとびに

けり涼しき風に

元日産自動車(株) 古川 修

合宿初日の班別自己紹介(研修)にて

みどり濃き丹沢の里七沢に友らと集ひて学ぶ

は尊し

なつかしき友の面輪に笑みあふれ語りてゆけ

ば心なごみぬ

をちこちゆ集ひし友の語りゆくあつき思ひに

心うたるる

自然企画 伊藤重義

大山のケーブルを降りしそのときに冷気吹き

きて熱さ忘るる

溝口敏盛

天地の恵み溢るる日の本の吾が国は神仏はそ

こかしこ

元大日本インキ(株) 中塚 毅

阿夫利社に登り来れば谷間より吹き来る風の

心地よきかな

古賀 智

うれしさは同じおもひのはらからと夜おそく

まで語り合ふこと

元山口県立熊毛南高校教諭 寶邊矢太郎

短歌創作導入講義をきく

歌つくる手引きつばらかに語ります君が面輪

のいきいきとして

松山に生れて育ちし君なれば子規をしたひき

し思ひ切ならん

(二回目の作品)

「しひて筆をとりて」をよみて

病床にふしてながむる庭の花ひとつひとつ名

を呼びて別れ告ぐ

来ん春にふたたびは逢へぬさびしさにたへて

草花の墓碑名刻む

日の本よかくあれかしと説く人の熱き思ひの
我が胸を打つ

福島義榮

武士道を説く若き師の迫力にこころ打たれて
高まり来るなり

第二十三班

(株)寺子屋モデル 横畑雄基

阿夫利神社より下山のケーブルカー

出発間際の折に

「鹿がをる、三頭をる」と声ありて我は驚き
かけよらむとす

(株)NTT東日本 平野耕治

すばらしきこの国柄と御言葉をかたり伝へむ
吾子吾友へ

日本大学教授 夜久竹夫

大山に向かふ間際にはか雨久しき登山に心
躍れり

雨降山三十年ぶりに訪ぬれば変らぬ茶店なつ
かしきかな

亜細亜大学講師 永井鉄郎

大山の清き名水喉走り登りしあとの暑さ忘る

中島法律事務所 中島繁樹

山登るケーブルカーの窓外に腕をいだして涼
風受けき

神奈川県立小田原高校(定時制) 教諭

中村正和

國武忠彦先生「古事記」のご講義後の
班別討議を終へて

われは今友の言葉に力えて誠の道を尽さんと
思ふ

(株)講談社 藤井 貢

山道を登りてゆけばあざやかにさるすべりの
花うるはしく咲く

一枝に白き花ありうす桃も濃き紅もありめづ
らしきかな

川久保 勲

國思ふ心あふるる同胞はろなちと語り合へたる時ぞ尊
し

維新政党・新風 佐藤昭夫

丹沢のキューハに眠る海鷲と集ひし若人歳は
同じか

第二十四班

F T I コンサルティング 伊藤俊介

(二回目作品)

慰霊祭にて小柳雄平兄・武田有朋兄と共に

に膳部を務める

七沢の静けき夜の齋庭にて友らと共に御霊に
仕ふ

神饌を捧げ持ちつつそろそろと歩み進めて友
に手渡す

献饌は無事に終ふれど撤饌の残れるを思ひ手
に汗にじむ

神饌を下げ受ける手の汗ばみてぎこちなけれ
ど務め果たしぬ

務め終へ安堵したりて我ら三人笑みをこぼし
つねざらひあへり

警視庁 大橋広和

(二回目作品)

慰霊祭

七沢の静けき森で御友らと先生方の御霊を偲
ぶ

(株)ロゼッタ 高木雅史

(二回目作品)

慰霊祭

祭りにて手長務めし友ら見て時すぎたりと切
に感ずる

伊佐ホームズ(株) 小柳雄平

(二回目作品)

合宿に参加する日の朝

しらみゆくいへぢにひかる月かけをあふげば

ちからの湧きくるこちす

事務局にて長内俊平先生ゆ届きし便りを
見つけし折に

七沢の集ひにたびし歌ふみの水くきにわが師
のみすがたを思ふ

(二回目の作品) 西日本電信電話(株) 武田有朋

慰霊祭

みまつりの庭の準備をする折に気にかかりた
る天候のこと

予報では雨の降らむか判じかね準備のまにま
気をもみてをり

幸ひに雨降らずしてみまつりは外にてしづか
に行はれけり

みまつりを終へてほどなく大雨の降りきて友
と驚き合へり

みまつりをつつがなく終へえたりしを天の恵
みとありがたく思ふ

(二回目の作品) 中外鉱業(株) 濱崎史嘉

バス停より合宿所までの道を歩いて
雨雲のまだ晴れきらず小雨降り雪のおつる街

道の木々

第二十五班

元中京コカ・コーラ 高村光紀

久し振りにまみえし友はいきいきとまなこ
かゞやかす若き頃の如く

病ひとのたゝかひのさまこともなげに話す
友の心頼もし

この集ひ五十年過ぎてても再会あれば友との縁
し更に覚えり

国民文化研究会

東海ゴム工業(株) 上村和男

福田兄を偲ぶ

ひぐらしの鳴く声ききつ坂道を登りてくれば
亡き友偲ばゆ

亡き友と学びの庭に集ひ来しかの日も暑さ厳
しき日なりき

元日商岩井(株) 澤部壽孫

に会ふ

八月二十三日、高村光紀君と五十年ぶり
はるばると名古屋ゆ来たる我が友のみ姿見え
て嬉しかりけり

髪白く身はやや痩せてみゆれども友の面輪は
若き日のまま

五十年も会はざりし友と語らふに昨日会ひた
る心地こそすれ

足を病む横浜の友も加はりて夕べ語らふひと
とき楽し(亀井孝之君)

杖つきて長き坂道登り来しと友の語れば涙ぐ
ましも(同右)

雲仙と大阿蘇の地に共々に学びし日々の甦り
来る

かかる友ありたればこそ若き日の誓ひ違へず
行き来し我は

大山神社にて

元(株)講談社 磯貝保博

登り来て一息つけば涼風にひたひの汗も引き
てうれしき

時折りに遠く雷鳴響きけり山頂近くは雨激し
きか

(株)伊勢利 今林賢郁

ケーブルに乗らでそのまま女坂のぼりゆくな
り老人三人(註・島津正敷・伊藤哲朗・今林

賢郁)

七十歳も真近になりぬと語らひつ老人はゆく
軽やかにして

山道は次第にけはしくなりゆきて息あへぎつ
つ石段踏みゆく

ただだきに近づく頃はも若きはわれらに迫

り抜き去りゆきぬ

昭和音楽大学名誉教授 國武忠彦
福田忠之兄を偲びて

もろともに語らひ学び過ごしたる君逝きまし
てふた月の経つ

君去りてあした夕べに現はるる君の面影なつかしきかな

なつかしき君のふるさと厚木なりさまざまな
ことよみがへりくる

夏の夜の厚木の森に月いでてなつかしきかな
君のふるさと

なつかしき君の姿の見ゆるかながやく月を
あかず眺めて

元福岡県立直方高校教諭 小野吉宣
朝のつどひの折に

日の丸を二人の学生肘のばし心を込めて静静
揚ぐる

ひるがへる日の丸仰ぎ君が代を腹の底ひゆ歌
へる嬉し

大山阿夫利神社に参りて

雷鳴は遠くに去りて雨上がり大山神社の杉木
立映ゆ

実朝の「雨やめたまへ」の言霊は天に届くや
霧立ちのぼる

(二回目の作品)

合宿も最後の夜なり慰霊祭近づきにけり身形
正しぬ

西空に黒雲のあり雨の来ぬことを祈りつ静か
に過ごす

祭りの場アケボノ杉の大木が取り囲みをりお
ごそかに建つ

天上ゆみ親のみ霊は降り給ひ我等が上を見護
り給へ

合宿教室に参加すべく七沢に向ふ
おぼろげな記憶をあてに車にて七沢の里を走

りゆきけり
ひさびさに会はんと思ふ友がきの顔思ひ出し

心はづみぬ
(二回目の作品)

「古事記」の講義を聞いて
いにしへゆ語り伝はる神々の話をただに聞き

いりてをり
いにしへに生くる人らの心にはおほらかなる

ものあるを知りぬる
吾れも又いにしへにつらなるものとして心広

くに生きんとぞ思ふ
元皇宮警察本部 亀井孝之

合宿地向かひし路に迷ひて
運転手に地図を示して乗りたるに着きし所は

合宿地にあらす
乗り来たるタクシーすでに走り去り呼ぶこと

かなはず途方に暮るる
仕方なく地図を頼りに歩くかと思ひし時に携

帯音の鳴る
救はるる思ひを感じ発信者を見れば約束せし

友の名ありき(高村光紀君)
四十年振りに合宿教室に参加して

四十年の時を隔てて合宿に来たれば昔の日々
の戻り来

若き日の昔のことども思ひ出ず我今あるもそ
の日々のありて

若き日の昔と同じ心持ち心新たに御講義受け
なむ

大山の険しき岩根の山道を若き友らと登るや
楽し

汗しつ登る山道ひぐらしの鳴く声聞こえ暑
さ忘るも

(二回目の作品)
先生の御講義聞けば新たな学びの道の見え

来るを思ふ

アルバイト

福岡県立春日高校一年 藤 啓太
山頂にたどり着いたはいいいものの足が痛くて
下山できない

運営本部

（株）寺子屋モデル 廣木 寧
厚木合宿にて学生発表を予定してゐた
福大生の山野成範君が事故に遭ふとの
知らせを聞きて

吾のもとに原稿もちてりハーサルを行なひし
こと三度となりぬ
ドイツにて彼我の文化に相異なることに気づ
きぬときみは語りぬ
帰国して

日本の文化にこがれしきみが思ひ国歌をきき
てほとばしり出ぬ
こぞの夏阿蘇のつどひのはじまりに君が代歌
ひぬ涙ながらに
厚木なる七沢にいそぐきみがバイクの博多の
街にて事故に遭ひぬと
電話にて詫びを告げくるきみの脚はギブスに
おははれうごかれずあると

(二回目の作品)

庭本秀一郎くんの講義で新渡戸稲造の
『武士道』をよみて

わが国に宗教なしと憂ひたるベルギーの碩学
何や知りけむ
古ゆわが国民の表はししその宗教情操にふれ
て言ふべし
他をいれてこころのうちをみがきこしわが国
民の心知るべし

他を知らずみづからをこそ正しきと告りたる
西洋人のおごりかなしき
千葉県木更津県税事務所 秋山信之

(二回目の作品)

久しぶりに会ひたる友等笑顔にて迎へてくれ
しは有難きかな
熊本県立熊本高校教諭 久保田 真

明後日転勤先のタイの地へ立つといふ日に演
壇に立つ
なりはひに勤しみながら思索せしあとたどり
つつ語りゆくなり
かくばかり長くも語り合ひたるは久し振りな
り電気消しても
「元気で」と言へば「行つて来ます」とぞ返
して君はドアを閉め行く

(二回目の作品)

憲法をかくまで深く考ふることなかりしと教
へ子は言ふ

全国に真摯に学ぶ友どちのありしと喜ぶ宮崎
の友
大学に帰りてのちも抱きたる疑問を忘れず学
び励まむ

指揮班

I M Sグループ 最知浩一
一年の準備整へ七沢に今日合宿を始めむとす
る
をちこちゆ集ひし友らと先人の残し給ひしみ
言葉学ぶ

(二回目の作品)

合宿に参加してくれし友へ
仕事終へ電車乗り継ぎ合宿に駆けつけたまひ
し友ありがたし
バス停ゆむし暑き道歩き来し友のワイシャツ
汗にまみれて
びつしよりとしばれるごとく汗をかき友は坂
道歩いて来しか
三十年前九州各地でこの友と学びし頃の思ひ
ださるる

これからも共に学ばむ先人の残し給ひし言の葉読みて

若築建設株 池松伸典

指揮班の役目で大山登山口に待機せし折
大山の御社目指し山坂を友らの登る姿思はる
大山はもやもかかれれば山坂に雨降らぬかと氣
にかかりけり

福岡労働局 古川広治

澤部和道兄（アサヒ飲料勤務）の
ジュースの差し入れ

あたりまへのやうに差し入れてくれし友の
気持ちがありがたく思ふ

作曲家・桐朋学園大学講師 武澤陽介
懐かしき人と再び語り合ふ楽しき時に暑さ忘
るる

（二回目の作品）

美しき君の御歌に触れし時ありし姿ぞ偲ばる
るなり

事務局

国民文化研究会事務局長 奥富修一

緑濃き山ふところの学び舎に四年ぶりにぞ我
はきにける

日ぐらしの声も聞えて夕暮れの空に満ちたる

月の影かな

元株竹中工務店 稲津利比古

厚木合宿所にて

七沢の山並み霧雨に煙るなか日暮し鳴きて今
宵暮れ行く

日暮しの鳴く音聞きつゝ、合宿の友らの帰館を
待ちわびにけり

元新潟工科大学教授 大岡 弘

四年ぶりに同じ山道を下りて

時たつは速きものかなつかしき道下りつつ
往時思ひぬ

帰りのバス窓外を見て

阿夫利山ふりさけみれば頂きを隠すがごとく
霧立ちのぼる

（二回目の作品）

大人迎へ慣れぬ司会をつとめたる今日のみ祭
とはに忘れじ

元川崎重工業株 山本博資

いにしへゆ「雨降山」てふ大山は小雨あがり
て遠雷聞えく

丹沢の山脈に連なる大山の秀麗なすがたをあ
ふぎ見あかぬ

（二回目の作品）

日の本の国の柱をゆるぎなくかためることは
つとめなりけり

つたへこしふみをらひらきて日の本の国柄学
べと子孫に伝ふ

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター 鳥津正數

今林賢郁さん、伊藤哲朗さんと

大山を登る

緑濃き阿夫利の峯を友どちと息はづませつつ
登り詰めたり

ケープルカーの窓の流れ来る涼風を、に受
けつゝ、大山を下れり

（二回目の作品）

夜はふけて杉の木立に囲まれしゆにはの庭は
静かなりけり

おごそかに慰霊の祭のはじまりてけいひつの
声響き渡りぬ

鳥栖市シルバー人材センター 西山八郎

合宿の営み

それぞれの役割担ひて努めます友らの姿に励
まされけり

あまたなる友らの務めに支へられ学びの集ひ
は営まれをり

（二回目の作品）

休憩し外に出づれば雨あがりそよふく風の心
地よきかな

株ラック 高橋俊太郎

レクリエーションバス送迎時の交通整理

のため坂の途中で待機せし折に
七沢へ続く坂道の途中にて一人静かにせみし
ぐれ聞く

(二回目の作品)

合宿終へ体力的には疲れしが氣力を得たりて
日々に戻らん

合宿終へ安どの思ひで君が代を声高らかに歌
ひあげたり

国民文化研究会 事務 栗方恵美子
和歌詠めず頭抱へて黙りこむ楽しきははずの夏
合宿の夜に

合宿地に寄せられし歌

福岡 小林国平

初合宿を送る教へ子へ

合宿への参加を決めし君からのメール嬉しく
幾度とながむる

何事も学びとらんと前向きに臨む姿は今も昔
も

阿蘇合宿短歌導入講義より一年

うれしやも今宵に合せ開きたる夕顔の花我が
家の庭に

夕顔の命見つめて歌詠みし祖父の御霊が咲か
せたかのごと

東京 坂東一男
久々の合宿参加に燃えたれど体調不良に行け
ず悔しき
をちこちゆ集ひ来たれる若きらの酷暑に耐へ
る学び尊し

青森 長内俊平

「第五八回全国學生青年合宿教室」に集ひ

ませる皆様に

日本武尊の「吾妻はや!!」と歎かれ給ひし
足柄峠望む里に集ひ給ふみ友らをぞ思ふ

あとがき

初冬の候、皆様にはその後如何お過しでせうか。厚木市「七沢自然ふれあいセンター」で共に学び、語り合った「合宿教室」から早四ヶ月が過ぎました。この度やうやくこの「感想文集」を皆様のお手元にお届け出来る運びとなりました。この「感想文集」は、「合宿教室」の最後に走り書きしていただいた感想文と短歌を編集したものです。

編集作業は、まづ、それぞれの班の班長又は班付の方々に、感想文と第二回目の創作短歌を添削・編集していただくことから始めました。

皆さんお一人お一人のお心こもる文章・短歌を丹念に読み返し、編集することは、神経、時間の掛かる作業ではありますが、お一人お一人のみづみづしい心の動きをお偲びできる、心楽しく嬉しい時間でした。

本感想文集編集方針は以下の通りです。

一 「感想文」について

執筆者のお心のうちが最もよく表れてゐる箇所を摘要し、表題も付けました。逆に文意

の不明瞭なところは、執筆者のお気持ちを辿りながら、原文のニュアンスが損はれないやう加筆しました。なほ、「かなづかひ」については、原文を尊重し、漢字および文法上の誤りについては訂正してをります。

二 「短歌」について

合宿では二回にわたって短歌を作りましたが、第一回目ものは班別相互批評にて添削され、全参加者それぞれ一首以上をもれなく巻末の「短歌詠草」に収めました。また、感想文の執筆の折に作っていた第二回目の短歌は、それぞれの感想文の末尾に入れました。こちらの表記は全員歴史的かなづかひに統一し、文法上の誤り等は感想文と同様に訂正いたしました。

この「感想文集」作成のためには、班長および班付の方々以外にも多くのご協力を頂きました。お忙しい生業の傍らご協力いただきました伊藤俊介、高木雅史、武田有朋、濱崎史嘉、佐野宣志、の各氏に心より御礼申し上げます。

カメラ・レポートの写真はカメラマン中澤武之さんにお世話になりました。

いろいろな方々のご協力によって出来上がった「感想文集」を、ご精読下さいませやう切願いたします。

本文集を読み進むにつれて、「合宿教室」の様々な感動が鮮明に甦ってくる事と存じます。お読みの後は、是非とも班長、班付、班友、更には他班の方へも、一筆お便りを差し上げていただき、今後も互ひに励まし合ひ学んでゆくことができますことを願つてやみません。

(北濱 道 記)

〔資料〕

第五十八回 “合宿教室（厚木）” 感想文集

非売品

平成二十五年十二月二十日発行

編集兼発行者

公益社団法人 国民文化研究会

理事長 上村和男

編集長 北濱道

東京都渋谷区東一―十三―一―四〇二号

〒一五〇一〇〇一―一

電話 〇三―五四六八―六二三〇

FAX 〇三―五四六八―一四七〇

